ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ(5)

～1999年：「ベルリンの壁」崩壊から10年～

吉　田　和比古

は　じ　め　に

ドイツの高校では第二次世界大戦の歴史を一年半かけて学んでいる。アウシュビッツのような強制収容所が存在した事実、毒ガスによる大量殺人など、歴史の真実をありのままに伝え、記憶に刻む。それゆえに平和への責任感が強いと言われている。一方、日本では、旧日本軍の敗北の惨めな姿、また侵略者としての実像を後代に伝えようという熱意はきわめて弱いのが現状である。そのために子供たちが暗い時代のできごとに疎くなりすぎてはいないだろうか。現代を代表する知識人の一人ミラン・クンデラは「（権力者に迫害される）弱者の闘争とは、忘却に対する記憶の闘争だ」と述べている。平和の建設にとって歴史的事実の忘却は悪となる。一部の人々や、あるいはあからさまな歴史修正主義者による意図的な「過去の記憶殺し」は決して許されることではない。今回の「ドイツ社会文化論(5)」は、1999年に日本のテレビで放映されたドイツ関連番組の内容解説が中心となっている。そして、1989年11月９日の「ベルリンの壁崩壊（Der Verfall der Berliner Mauer）」の10周年にあたる。個人的に言っても、時間の経過のスピードの速さにうろたえるばかりでなく、かつての歴史的な出来事の忘却への不安もまた隠せないでいる。1999年は、1989年12月９日の「ベルリンの壁」崩壊から10年という「佳節（？）」にあたり、この年の秋はそれについての関連番組が多く放映された。現在、原稿執筆しているのは2003年９月である。つくづく時間の経過の速さを感じる。ニューヨークに

おける凄惨な同時多発テロからは、すでに2年が経過し、超大国とテロリストとの「非対称な戦争」は今も続いている。

1999年〔平成11年〕

263.「家庭のゴミはこうして減らす」〔1999年1月11日・『クローズアップ現代』・キャスター：国谷裕子・NHK・30分〕

日本とドイツ、家庭から出るゴミ袋の中身を徹底比較した。そしてその分析の結果から浮かび上がってくるごみ減量のための手がかりを明らかにする。家庭から出るゴミが一向に減らない日本のゴミ埋め立て処分場は数年後には満杯になるといわれている。一方、ドイツでは思い切った政策により家庭ゴミを大幅に減量することに成功。両国の家庭ごみの中身の分析の結果、一番大きな違いはプラスチックごみの量であった。一週間で出るゴミの量は、日本では「41.9ℓ（一人あたり）」ドイツでは、「11.7ℓ（一人あたり）」と日本の4分の1一に過ぎないことが分かった。41.9リットルの中で、「容器・包装」ゴミは27.6リットル、ドイツではわずか2.5リットルとその差は歴然としている。ドイツでは政令により、容器や包装紙はリサイクルが義務付けられている。日本で調査が行われたのは大阪のベッドタウン寝屋川市（人口26万人）。調査の対象は団地・一戸建て80世帯について行われた。結果は、どの家庭のゴミも60パーセント以上が包装容器で占められていた。ドイツの調査は、人口も寝屋川と同規模の南部の都市フライブルクで行われた。ドイツで容器・包装の回収・リサイクルを法律で企業責任としたのは1991年のことである。〔→「包装廃棄物回避のための政令（Verordnung über die Vermeidung von Verpackungsabfällen）」〕当時各自治体の埋め立て処分場は数年でパンクするという深刻な事態に陥っていた。企業は当初反対したが、ダイオキシン問題など環境問題への世論の高まりから受け入れざるを得なかった。ドイツ環境省の廃棄物担当ルメラー課長は番組の

中で次のように語っている。「市民、市町村、州がみんな政令を望んでいました。だから産業界に対して強い態度をとれたのです」なお、番組で紹介されるドイツの企業責任システム（Dual-System）についての内容は、「ドイツ環境産業革命(1)」でより詳しく説明されている。ゲスト：植田和弘（京都大）は番組の中で次のように述べている。「包装容器法や現在のシステムが完全ではなく、いろいろな問題があるものの「循環経済」という理念を見据えて、より改変的にシステムを作り上げようという社会の実験的精神がドイツでは生きているという気がする」。ひるがえって、日本ではどうであろうか。社会の中でさまざまな企業の不祥事が露見するのは2000年を過ぎてからである。

⇒関連映像資料：

160.「ドイツ環境産業革命 (1) 包装法が社会を変える」〔1996年6月24日・ETV〕『法政理論』第34巻第1・2号　p.49-50　2001年

「大量廃棄社会に未来はあるか」〔1995年3月13日・ETV・90分〕

「ゴミは誰の責任か」〔1996年11月9日・BS1・50分〕

「岐路に立つリサイクル」〔1997年3月1日・50分〕

「これでいいのか日本型リサイクル」〔1999年2月6日・BS1・50分〕

「ゼロエミッション～廃棄物ゼロ社会をめざして～」〔2000年2月19日・『金曜フォーラム』・ETV・70分〕

「リサイクル社会は幻想か～ゴミ大国日本への警告」〔2000年2月21日・NHK・50分〕

264.「EU～統合の課題」〔1999年1月22日・『教育セミナー・世界くらしの旅』・講師：加賀美雅弘（東京学芸大）・ETV・30分〕

現在EU（European　Union：ヨーロッパ連合）が進めている経済統合・地域統合のもつ課題について考える。番組の前半は、統合に伴ういくつかの話題を取上げ、後半では、地域統合と相反するかのようなEU域内の「民族問題」について考察する。EUの二つの大きな政策は、(1)経済統合と、(2)政治統合で、関税の撤廃と単一通貨による一つの市場を

創出することが目的である。またEU域外の製品に一定の関税をもうけることにより、EU域内の産業の保護育成をはかろうとしている。政治統合に関しては、加盟国に共通する外交および安全保障政策を取り、国家主権の一部をEUに移転することにより、共通の政策を行おうとするものである。こうしてEUは「国境」のないヨーロッパを築こうとしている。統一市場形成のために1993年には、まず国境でパスポート・チェックをなくすといった検問の簡素化から始まった。独仏国境の町ストラスブールでは、入国審査もなくなり大勢のドイツ人観光客が訪れるようになった。国境のライン川にかかるヨーロッパ橋は、検問が無くなり、独仏両国の市民は、隣町にでかける感覚で橋を渡って行き来している。20世紀には、ナショナリズムやファシズムの嵐が吹きすさび、普仏戦争、第一次・第二世界大戦で多くの血を流した独仏がようやくたどりついた、あるいはようやく学び取った理想的な政治の形を象徴しているとも言える。番組ではトピックとして「ヨーロッパの民族問題」取り上げられている。とりわけ少数民族集団は、冷戦体制崩壊後に新しい動きを見せている。少数民族は各国の周辺部の国境地域に分布する。たとえばドイツでは、旧東ドイツ、現在のブランデンブルク州のシュプレー・ヴァルト（Spreewald）にスラブ系の少数民族ゾルベン人が住んでおり、この地域の中心的都市コットブス（Cottbus）では街路表示はドイツ語とゾルブ語の二重表記になっていることは意外と知られていない。少数民族の生活圏と無関係に、国境が政治的意図で引かれていることによる。そしてEUの進展とともに、国境という縛りがゆるくなってきた現在、それぞれの少数民族は政治的独立を模索するようになってきている。この点は、これからも見逃せない問題の一つである。

265.「ユーロ誕生後のヨーロッパ」〔1999年1月28日・『あすを読む』（山田伸二：NHK解説委員）・NHK・10分〕

ヨーロッパの統一通貨ユーロが誕生してから一ヶ月が経過した。ユーロは信頼できる通貨として着実に歩み始めたと、年頭にヨーロッパ4カ

国を視察してきた山田解説委員は語る。ただその受け止め方については、国ごとによってかなりの温度差が見られたそうである。フランスではユーロの誕生を積極的に受け入れてこれを祝福している様子が語られる。これに対して、ドイツ、オーストリアでは冷めた印象を与える。ベルリンやウィーンにおいては、パリに見られたようなユーロ誕生を記念する飾りつけも見られず、伝統的な「マルク（Mark)」を失う寂しささえ漂っているという。ユーロ発足当時ユーロはドルに対して強含みで株価も上昇した。しかしその後ブラジルの経済危機が冷水を浴びせ、ユーロ株も売られた。一方「円」に対しては、1ユーロ＝約130円前後で比較的安定した推移を見せている。統一通貨を導入する過度的段階とはいえ、商品価格については国ごとに大きな隔たりが見られる。たとえば自動車であるが、「フォード・モンデオ」を例にとると、ドイツ（15000ユーロ)、フランス（13300ユーロ)、スペイン（10500ユーロ）と、ドイツとスペインとではおよそ1.5倍も値段が違ってくる。このような地域格差は将来的には平準化していくのかどうか、まだ課題が残されているといえる。通貨統合は、自国の通貨を放棄するだけではなく、金融政策も中央銀行にゆだねることになる。各国ごとの財政政策とのすり合わせはどのようになるのかも興味のあるところである。いずれにせよ EU の通貨統合は歴史的にも壮大な実験であり、未来の地球経済のあり方を、すなわち進化した人類文明の世界をイメージする際の仮説としての「グランド・デザイン」でもあることだけは確かである。

266.「お寺はドイツだ！～連香寺のオリンピック～」〔1999年1月31日・NST＜フジテレビ系列＞・50分・製作：長野放送〕

本番組は、1998年度の「民放連盟賞娯楽部門最優秀賞」を受賞した長野冬季オリンピックにまつわるドキュメンタリー作品である。この大会で、ドイツは金12、銀9、銅8、合計29個のメダルを獲得し、史上最高の成績を収めた。1998年2月の「長野冬季オリンピック」開催中、ドイツ国内で最も有名になった日本人がいる。彼はドイツのオリンピック関

連番組のオープニングを毎日飾っていた。それは長野市川中島・蓮香寺の住職樋口誠順（じょうじゅん）氏である。蓮香寺は630年前の南北朝時代から続く浄土宗の名刹であるが、オリンピックの開催中ドイツの「ゲストハウス」となり、期間中に訪れたドイツ人は述べ5000人に上った。ドイツはこれまでのオリンピックでも開催国固有の文化を代表する建物を使ってきたが、今回は蓮香寺に白羽の矢を立て、かなり早くから準備を進めてきた。番組では、受け入れから本番、そして期間終了に至るまで、ドイツ文化の「顔」として、そして日独文化交流の草の根的役割を果たした連光寺に密着取材をする。当初、日本家屋の鴨居（かもい）の低さが、背の高いドイツ人にとっては明らかに不便さを感じるのではないかと危ぶまれたが、あえてそれを承知で、開催国の文化に積極的にかかわろうとするドイツ側の意気込みには、注目すべきものがある。

267―269.「平和を求めて　①大戦への過程　②ふたつの世界～冷戦下の混迷　③新しい世界秩序」〔1999年3月8日・『海外ドキュメンリー』・BS1・製作：BBC／イギリス1997年　原題："The Search for Peace"・各50分〕

番組のキャスター、ダグラス・ハード（Douglas Hurd）は、元イギリスの政治家。外交官を経て政界入りをし、サッチャー内閣で外相などを歴任する。自らの外交官としての経験を生かして、番組では20世紀初頭の第一次世界大戦の勃発にいたる原因分析をしている。その切り口は、歴史家の思弁的な記述とは違い、国際政治とその延長戦としての戦争という「パワー・ゲーム」のありようが国際政治家の言葉で語られる。歴史ドキュメンタリーはともすれば豊富な映像記録を駆使して出来事の時系列に沿った羅列に終わりがちであるが、彼の語り口にあたかも歴史の現場にいたかのような錯覚にとらわれるのは、ハード自身の外交経験あってのことだろう。BBCの手堅さの典型を見るような良質の教養番組といえる。一回目は、第一次世界大戦勃発の原因と、大規模な戦争回避のために模索された新しい考え方として「国際連盟」の成立が詳しく扱

われる。第二回目は、戦後冷戦下における「ベトナム戦争」をめぐる国際的な虚虚実実の駆け引きが、現場を見てきたハード氏ならではの語り口で興味深く紹介される。

ベトナム戦争当事、アメリカ安全保障問題担当大統領補佐官（1968－1973）だったキッシンジャーは、アメリカがベトナム戦争に介入していく過程を振り返って番組の中のインタビューで次のように述べている。「アメリカの価値観は、文化や風土にかかわらず、世界のどこでも普遍的に通用する、アメリカ人にはそんな強い思い込みがあります。保守であれリベラルであれ、この点については何の変わりもありません。民主主義というイデオロギーを武器とすれば必ず敵を打ち倒せる、そう考えているわけです」。

ベトナムはアメリカの理想を求めてはいなかったにもかかわらずアメリカは強大な武力を用いて自らの理想すなわち「民主主義」を押し付けようとした。このときアメリカの理想主義はかつて無いほど残虐な姿に変貌し、やがてアメリカ国内の道徳的混乱をもたらすこととなる。国内の反戦デモには容赦ない国家権力の弾圧が加えられた。当時ジョンソン大統領の特別補佐官をしていたロバート・マクナマラは、軍部の突き上げと市民の反戦の声の盛り上がりの板バサミの中で辞任に追い込まれる。番組の中でマクナマラは当時を振り返りこう語っている。「われわれは自分たちのことを世界中の誰よりも賢い神のような存在だと思っていました。それが大きな間違いであることをベトナムが実証してくれたんです。われわれは正義を追及している。誰かがその行動に反対するようなら、それを不正とみなし、あくまでもわれわれのやり方を貫く、国家としてそんなことを言うのは間違いなんです。（…）誰かが人権問題という言葉を口にしたら、その言葉の意味をきちんと分析し吟味する必要がある。もしある国で市民の自由とごく一般的な行動が明らかな侵害を受けている場合には、何らかの対応をすべきだとは思います。しかし自分たちの国の法律が他の国でも通用するかのような態度で西欧流の民主主

義を行使しろ、さもなければ制裁措置を取るぞというのは考えものです。それは外交政策として望ましいものでありません」。ハード氏はキッシンジャーのことを理想と現実のバランスの取れた政治家と高く評価している。キッシンジャーは外交政策によって共産主義国家の軟化を進めることに成功し、米国と中国は国交を回復した。人間の世界は、普遍的価値観に存在するとしても、それは他者から押し付けられるものではなく、内発的に生まれてくるはずのものであることは、依然としてアメリカの政治家は学び取っていないということが良く理解できる番組である。

⇒関連映像資料：**270.「キッシンジャーとニクソン～ベトナム撤退のシナリオ～」**〔1997年4月26日・WOWOWで放映・95分〕

このテレビドラマは、米軍のベトナム撤退と「名誉ある和平」を模索したキッシンジャー元大統領補佐官のパリ和平会議における外交的な駆け引きを描いたもの。「戦争」というかたちで振り上げられたこぶしを下ろすことが、いかに困難を伴うかを丹念に描いたテレビドラマの秀作である。アメリカでは前年の1995年12月に放映された。ドラマは、1972年6月25日、南ベトナム解放戦線（ベトコン）の最高会議において、日系俳優ジョージ・タケイの扮するレ・ドク・トがアメリカとの交渉に乗り出すことを決意するところから始まる

271.「音楽ドキュメンタリー・大作曲家バッハ」〔1999年3月12日・「クラシックコンサート」・BS2・製作：BBC、1997年。日本語版字幕米沢啓子　60分〕、出演：ピアノ／アンドラーシュ・シフ／チャールズ・ローゼン／ジャック・ルーシェ、オルガン：ピーター・フォード。チエンバロ：ジョアンナ・マッグレガー／トン・コープマン／ティニ・マトー、合唱：ライプチヒ聖トーマス教会聖歌隊。

イギリスのテレビ局が製作した音楽家の生涯と作品の足跡をたどるドキュメンタリー番組で、ナレーションは、イギリスの名俳優ケネス・ブラナーが行い、番組をよりゴージャスなものにしている。生物学者L.トーマスは、「地球外の文明に人類が贈るべきものは？」と問われて、

「バッハの全集だ」と答えた。そして「自慢しすぎだろうが…」ともつけ加えた。Johann Sebastian Bach〔1685－1750〕、バッハは1750年に没した当時、作曲家より鍵盤楽器奏者として知られ、19世紀前半まで作品は半ば忘れられていた。だが、今日では音楽史上屈指の遺産と考えられている。バッハにとって音楽は、神の栄光と精神の充足に到達するためのものであった。彼の作品は、バロックの精華であり、近代音楽の祖でもある。西洋のさまざまな儀式で、おそらく最も多く演奏される作曲家である。また、「平均律クラヴィーア曲集」は、鍵盤楽器曲に革命をもたらした作品とされる。前奏曲とフーガ24曲からなる第一巻の巻頭には「音楽を志す若い人々のために」と書かれている。モーツァト、ベートーベン、ショパン、シューマン、バルトークなどは毎日この曲を弾いて練習したと言われる。そして現在のピアニストもそうである。したがってバッハの「平均律クラヴィーア曲集」は「音楽の旧約聖書」とも言われる。番組後半では、「マタイ受難曲」・「ミサ曲ロ短調」について、専門家による興味深い解説が行われている。また、1980年代にバッハをジャズ表現でよみがえらせたフランスのジャズピアニストであるジャック・ルーシエが登場しているのも、このドキュメンタリーの構成のバランスの良さを反映している。バッハは、1750年すなわち筆者が生まれる200年前に亡くなった人物であるが、筆者自身50年以上生きてきて、その４倍の200年という時間が、数量的に把握できるような実感を覚える。そして、その200年という時間が案外最近だったような気がして、バッハがさほど遠い過去の人物とは思えなくなっている。

272.「アンナ・マグダレーナ・バッハの日記」（“Chronik der Anna Magdalena Bach” 1967　西ドイツ＝伊）　監督・脚本：ジャン・マリー・ストローブ／ダニエル・ユイレ。　出演：グスタフ・レオンハルト、クリスティアーネ・ラング。

バッハの伝記映画であり、全編にバッハの音楽が流れる。彼を演じるのは「現代のバッハ」といわれるＧ・レオンハルト。レオンハルト演奏

による『ブランデンブルク協奏曲』から始まるこの映画は、バッハの二番目の妻となるアンナと再婚し、その死にいたるまでの30年近くに渡る年代記となっている。映像はたえずバッハの音楽の演奏によって占められ、ナレーションはアンナの声で、二人の生活を語り続ける。そして「ミニマル＝シネマ」と呼ばれるストローブ＝ユイレの新しい映像感覚はドラマであるよりも、むしろドキュメンタリーというジャンルに限りなく近い。市販DVDのタイトルは「アンナ・マグダレーナ・バッハの年代記」（B&W　94分）

273.「日独裁判官物語」〔1999年3月28日・『ドキュメント99』・TeNY・25分〕

片桐直樹監督は、ドイツの裁判官と日本の裁判官の「アフターファイブ」を題材とした映画「日独裁判官物語」を製作している。片桐監督の撮影風景を追いながら、日本の司法のあり方、裁判官の市民的自由について考える。組織犯罪対策三法案に反対する集会に参加した仙台地裁判事補が，分限裁判にかけられた。ドイツでは、裁判官の一般市民としての政治活動には何の制限もないという。

⇒関連新聞資料：〔『朝日新聞』（1999年3月26日）〕「赤と黒―といっても、スタンダールのあの小説ではない。裁判官が法廷で着る法服の色のことだ。日本の最高裁は黒、ドイツの憲法裁判所は赤である。双方の司法界の雰囲気を象徴してはいないだろうか。記録映画「日独裁判官物語」が完成した。のっけから考えさせるシーンが登場する。皇居に面した最高裁。判事たちが黒の大型車で次々と登場する。外から顔は見えない。場面は変わってドイツ。赤いオートバイが走ってくる。ついたのは憲法裁判所。ヘルメットを脱ぐ、判事だった。このあと、ドイツの裁判官たちがカメラを前に話す。「市民のための裁判所」という言葉が何度も語られる。社会民主党の党員もいれば、ボランティアで法律を教える人もいる。人柄が画面から伝わってくる。実際の裁判風景も紹介される。「どうぞ座ったままで」といいながら法廷に入

ってくる裁判官の姿が印象的である。日本はどうか。裁判所構内での撮影は一切許可されなかった。それでも、元裁判官の話などを通じて、司法の現状が浮かび上がる。「団体に加入することなどない。家に引きこもっている人が多い。裁判の準備で忙しくてほかのことはできないのです」。政治的な主張を含めて立場をはっきりさせ、地域とのつながりも大事にするドイツの裁判官とは対照的である。現職も二人インタビューに応じた。法制度や歴史、国民の意識名など違う点もある。どちらがよいとは決め付けられない。だが、こんな司法もあると知るだけで意味はある。裁判官にもぜひ見てもらいたい。」

以下では、毎日新聞の記事を抜粋して引用することにする。〔『毎日新聞』1998年10月23日〕「自由に意見を表明でき、政治活動への参加も制約がないといわれるドイツの裁判官と日本の裁判官の違いを描こうと制作が始まった記録映画「日独裁判官物語」の製作スタッフが最高裁に法廷や庁内の撮影を申請したが、「前例がない」などとして拒否されていたことが22日分かった。一方、ドイツでは連邦憲法裁判所（筆者注：日本の最高裁判所に当たる）の長官らがインタビューに応じるなど撮影は順調で、両国裁判所の対応は対照的。スタッフから「この対応の大きな“落差”が日本の裁判所の実態を物語っている」との声が上がっている」。

274.「ブダペストのドナウ河岸およびブダ王宮地区（ハンガリー）」〔1999年3月21日・『世界遺産』・BSN＜TBS系列＞・30分〕

ドナウ川が南北に縦貫するブダペスト。この美しい街は「ドナウの真珠」と讃えられている。西岸の小高い丘には王宮の町ブダ。東岸には商業の町ペスト。19世紀の中ごろ、ドナウ川に橋がかけられ、川の両岸のふたつの町はひとつになり、ブダペストと呼ばれるようになった。ハンガリー建国1000周年を記念して建てられた国会議事堂。1885年に着工され、9年の歳月をかけ完成した。ネオゴシック様式の巨大な建造物。階段や回廊は述べ20キロに及び、部屋の数は691を数える。ハンガリーの

長い歴史が育んだ文化と技術が凝縮され、それが世界遺産として評価された理由の一つになった。ハンガリーは何世紀にもわたって、異民族の侵入と戦乱に曝された。1526年、ついにオスマン軍に敗れ、以後150年の間、ハンガリー民族はトルコの支配に苦しめられた。教会はイスラム教のモスクに変えられ、豊かな温泉を利用して、トルコ式の浴場が作られた。その一つ「キラリー温泉」も、今では市民の憩いの場所となっている。ブダペストの都市文化の香りを伝えるペスト地区の「ニューヨーク・カフェ」。19世紀末、多くの作家や芸術家がここに通い、議論に没頭した。ブダペストの世紀末は、建国1000年際の盛り上がりの中でハンガリー民族とは何か、マジャール（ハンガリー国民の自称）の文化とは何か、が問われた時代だった。このカフェ文化の中に「ハンガリーのガウディ」と呼ばれた建築家レヒネル・エデンがいた。(英語名：Budapest, the Banks of the Danube and the Buda Castle Quarter, 登録年：1987年)

275.「ザルツブルク市街の歴史地区（オーストリア）」〔1999年4月4日・『世界遺産』・BSN＜TBS系列＞・30分〕

ザルツブルク（Salzburg）とは「塩の城」という意味。オーストリアとドイツの国境近くに位置する。古代よりこの近辺で岩塩が採掘され、その集積地であったこの町は繁栄した。ホーエンザルツブルク（Hohensalzburg）という、堅牢な要塞に守られた美しいバロック建築がここに花開いた。天才音楽家モーツァルトはここで生まれた。しかし、宮廷音楽家の地位を捨てて故郷を出て行くことになる。ザルツブルクのシンボルともいえる大聖堂（Dom)。イタリアから来た大司教がここの建築を命じるが、完成を見ないでホーエンザルツブルク城に幽閉されて、そこで死んでしまう。イタリアのバロック様式を取り入れた建築が美しい。大司教の居城、レジデンツ内である。モーツァルトはここに幼いころから呼ばれ、大司教の前で演奏を披露した。すべての部屋の天井にアレキサンダー大王の絵が描かれている。宗教と政治の頂点に立つザルツブル

クの大司教は、絶大な力を持っていてアレキサンダー大王に自分の理想像を重ねていた。大司教の夏の離宮「ヘルブルン宮殿」、ここは庭に特徴がある。水の仕掛けがあちこちにあり、観光客を楽しませている。かつて大司教は、この宮殿に客を呼び、宴のクライマックスになると水を降らせて客をずぶぬれになるのを見て喜んでいた。（英語名：Historic Center of the City of Salzburg，登録年：1996年）

276.「21世紀の道作り・新たな変革の時代へ」〔1999年４月２日・『金曜フォーラム』・ETV・70分〕

1999年３月、これからの道のあり方をめぐって東京でシンポジウムが開催された。このシンポジウムは21世紀を目前に「交通渋滞・大気汚染・地域社会と経済の活性化・高齢化と福祉」といったこれからの道路整備にも深くかかわる課題と、これからの道路が果たす社会的役割を幅広く考えようというものである。車社会の急速な進展に伴い、いまや道路の主役は車となった。日本における自動車免許取得者は7100万人を越え、およそ7300万台の車が道路を行き交っている。しかしこれは自明の理ではないのであって、車社会の進展は社会のさまざまな局面に深刻なひずみをもたらしている。たとえば交通事故による死亡者はかつてほどではないにしても、年間１万人近くに達し、相変わらず日本は「交通戦争」の戦時中であるといってよい。また、朝夕の交通渋滞に伴う経済的損失は、年間１兆円とも試算されている。まさに自動車社会ならではの壮大な無駄が生じている。さらに、排気ガスなどによる大気汚染も一向に改善の兆しが見られない。だが近年、市民意識の向上とともに、従来の道路づくりに無駄は無いのか、厳しい目が向けられるようになってきた。また、人間の生命の安全を重視した道路、環境に配慮した道路など、人々が道路に求める要望も多様化している。番組では、そうした現状を踏まえて行政と道路利用者という二つの立場から討論が行われ、進んだ道路行政の先行事例としてドイツのフライブルク市の事例が詳しく紹介されている。

フライブルク（Freiburg）は、人口20万人のドイツ南部バーデン＝ヴュルテンベルク州にある中世以来の商業都市である。街の中心部は、路面電車とバスを除いて一般の車は通行できない歩行者優先地区になっている。商品の運搬など業務用の車には通行許可証を発行し、夜の7時から午前11時の間は通行できるようになっている。Kaiser Josef Straβe などの中心部が歩行者優先になったのは1973年のことである。1960年代後半から、町にあふれた車が大きな社会問題になっていた。世界の都市問題対策のモデルともなったフライブルクの取り組みは、もっと注目されてよいだろう。

⇒関連映像資料：**277.「都市の未来を探る～5つの都市　5つの挑戦～」**〔2000年8月26日・『ワールドドキュメンタリー』・BS1、製作：ラジオ・プロダクションズ　カナダ／2000年〕。

⇒関連映像資料　**278.「自転車と街づくりを考える」**〔2000年10月20日・『金曜フォーラム』・ETV・70分〕パネリスト：高田国道（日本大学理工学部交通土木工学科）、星野知子（女優）、町田守（自転車が走るまちづくりの会　会長）、大石久和（建設省）、トン・ヴエレマン（前・オランダ運輸公共事業水利省乗客輸送局長）、コーディネーター：横島庄治（高崎経済大学地域政策学部）。

279.「アルプスの村でなまはげに出会った」〔1999年4月4日・『世界遺産』・BSN＜TBS系列＞・30分〕

標高4000メートルを越えるスイス・アルプスの谷間に、11月から6月の8ヶ月間、雪の中で暮らす人口1500人のレッチェンタール（Lötchen-tal）という小さな村がある。1920年代までこの村に入るには3000メートル急の山々を歩いて越えなければならなかった。ここに住む住民は、はるか3世紀にローマ帝国の軍隊に追い立てられた少数民族の末裔ともいわれている。この村にはキリスト教化される以前の古代信仰の痕跡が色濃いチェケタと呼ばれる「仮面謝肉祭」が今に伝えられている。秋田の「なまはげ」に良く似た仮面をかぶり村を練り歩く。なにやら叫び声

がなまはげの発する『なぐごはいねが？（泣く子はいないか）』と聞こえてくるから不思議である。キリスト教では復活祭の一ヶ月前、肉食が禁止されているので、その前に大いに食べ、そしハメをはずすという民衆のエネルギーがこの祭りを支えている。春を呼ぶ仮面謝肉祭は、ドイツやオーストリアなどの冬の気候の厳しい土地にも多く見られる。番組では、このほかにドイツ各地の春を呼ぶ大切な祭りとしての「愚者祭り」が紹介される。２月11日はチェケタ祭りの当日、いよいよ「なまはげ」の登場である。取材箇所：南ドイツ・シュヴァルツヴァルトのロットヴァイル（Rottweil），ドナウ川の上流の町フリーディンゲン（Friedingen）。

⇒関連映像資料：200.「ヨーロッパ冬物語・舌を出せ　愚者たちの祭典～ドイツ・ウルム市～」〔1997年２月27日・BS２・50分〕『法政理論』第35巻第４号　p.170 - 171　2003年。

280.「アンネの日記～隠されたページの秘密～」〔1999年４月８日・『海外ドキュメンタリー』・ETV・制作：デイトライン・プロダクションズ／TVマターズ／IDTVオランダ　1998年45分〕

アンネ・フランクがオランダ・アムステルダムの運河沿いの家の屋根裏でひそかに書き綴った『アンネの日記』は世界的なベストセラーとなっている。実はこの本が出版されるに当たり意図的に削除されたページがあることが分かった。今回このページが発見されたことによって、アンネの人物像に新たな光が当てられることになった。番組ではこの失われたページにスポットを当てて、それがどのような内容なのかを検証する。番組の前半では、1933年の夏に故郷のドイツからオランダに逃れてくるときからのフランク一家の歴史を、記録フィルムを挿入しながら詳細に紹介していく。オランダは、古くから迫害を受けたい人々や難民を多く受け入れてきた。自らの歴史の中にスペインによる圧制の記憶を抱えているからである。ヒトラーが政権を獲得してから多くの14万のユダヤ人難民がオランダに移住してきた。第一次世界大戦で中立を貫いたオランダは、ヒトラーのポーランド侵攻後も中立を貫けると考えていたが、

ヒトラーはオランダにも攻め入る。オランダは降伏しドイツの占領下に置かれることになる。同時にナチスの人種差別政策がオランダでも実行に移され、厳しいユダヤ人狩りが始まった。オランダ在住のユダヤ人が収容所に強制移送される段階になると、一家は隠れ家に移り住んだ。アンネはそこで2年間に渡り日記を書き綴った。最初の日記は「Aテキスト」、後世に出版することを想定してつづられた日記は「Bテキスト」と呼ばれる。一家でただ一人生き残った父オットーが戦後出版した「隠れ家」(1947) と題されるオランダ語版アンネの日記は「Cテキスト」と呼ばれる。1947年に出版されたこの日記はあまり売れなかったが、アメリカで製作された映画「アンネの日記」が火付け役となった (1959年)。やがて60年～70年代にかけて世界的なベストセラーとなり60以上の言語に翻訳された。一方でネオナチのグループがホロコーストなど起きなかった主張し始める。いわゆる歴史修正主義者が主張する「アウシュビッツの嘘」である。そし「アンネの日記」もユダヤ人たちによる偽造であると声高に叫んだ。ネオナチの口を封じるために、1980年西ドイツ連邦犯罪捜査局は、日記の信憑性について調査を開始。捜査官はスイスに住んでいるオットー・フランクのもとに派遣され、オットーはアンネの手書き原稿をすべて提出することになったが、その時彼は5枚の原稿を信頼できる友人に隠してもらった。

281.「21世紀への証言：誤算なき未来へ　ミハイル・ゴルバチョフ」〔1999年4月25日・BS1・30分、1998年4月25日の再放送・60分〕

ミハイル・セルゲイビッチ・ゴルバチョフ (Mikhail S. Gorbachev) かつてのソビエト共産党書記長そしてロシア初の大統領として東西冷戦を終結させ、人類を核戦争の脅威から解放した人物として長く歴史に残る人物の一人である。番組の冒頭で彼は語る。「歴史は変えられます。定められたものではありません。私たちは80年代に歴史の流れを変えたのです」。しかし、歴史の流れを変えるという大事業は、結果的には自らの祖国ソビエト連邦を崩壊へと追いやり、さらに経済危機を引き起こ

した。番組の冒頭のインタビューで、彼は「ペレストロイカ（世直し）には誤算があった」と語るところから番組は始まる。聞き手は、長くNHKのモスクワ市局長を勤めた小林和男氏である。氏は、東西冷戦崩壊の過程を、絶えずモスクワという重要な地点から定点観測し続けた歴史の証人と言ってもよいジャーナリストである。たしかに、ゴルバチョフの改革の過程にはいくつかの誤算があった。ここで言う誤算とは、ソビエト連邦の民主化と、共産党の存続という、まったく方向の異なるベクトルの力に彼自身がまた裂きになってしまったことを意味している。人類に再びその過ちを繰り返してほしくない－ゴルバチョフ氏は今そうして21世紀を見つめている。現在モスクワ市内には「ゴルバチョフ財団（Gorbachev Foundation)」が設置され、ここがゴルバチョフ氏の活動拠点になっていて、国際的な政治や経済問題についての問題を調査研究するシンクタンクとなっている。この財団には、大統領時代の補佐官や経済顧問など、かつて彼を支えたスタッフがそろっている。財団は今、1998年ロシアを襲った経済危機についての研究に力を注いでいる。ソビエト連邦崩壊後も一向に改善されない市民のくらし－ゴルバチョフ氏は、そのことにペレストロイカを始めた頃と変わらぬ責任を感じ続けているという。かつて1989年11月9日の「ベルリンの壁崩壊」の一番の立役者であったゴルバチョフ氏の存在は、かつての東西ドイツ両国民には大きな存在として長く記憶され続けるだろう。

⇒参考映像資料：

「危機に立つペレストロイカ」〔1991年1月23日『NHKスペシャル』・60分〕

「激動のペレストロイカ～クレムリン抗争の記録～」〔1991年9月25日から6夜連続〕(1)ゴルバチョフ登場、(2)グラスノスチの試練（注：グラスノスチは「情報公開」)、(3)エリツィンの挑戦、(4)草の根の反乱、(5)揺らぐ連邦制、(6)孤立するゴルバチョフ。（NHK/BBC共同制作・各45分〕

「インサイドストーリー・ソ連を変えた7日間」〔1991年8月24日・NHK・90分〕

282.「がんばれ　中小企業　ドイツの魚屋さん」〔1999年5月2日・『世界ウルルン滞在記』・BSN＜TBS系列＞・55分〕

番組は次のようなナレーションで始まる。「ドイツのケルン、この町に魚嫌いのドイツの食文化を変えた革命児がいる」。ムスタファ・ムラベッツさん（31）の弁。「私はドイツ人の食習慣を変えた。食文化に革命を起こしたのだ」。8年前にオープンした魚屋さん今では年収1億2千万円、8年前までドイツ人は、タラ(鱈)、サーモン(鮭)、スズキ(鱸)の3種類の魚しか食べていなかったと言う。料理法は切り身をクリームソースで煮るだけ。しかし、今ではムスタファさんのおかげで、煮魚、焼き魚、刺身などにして100種類以上の魚を食べるようになった。ムスタファさんの魚売りにはアイデアがあった。お客さんにレシピ（レツェプト）を配ってそれぞれの魚に適した料理法をこまめに教えてきたのである。そして一日200人以上のお客さんが来るようになった。ムスタファさんは店をもっと広げたいと願うと同時に作ってみたい料理がある。そこで彼は日本の魚料理の上手なパートナーの登場を待っていた。ムスタファさんは名前からもわかるようにドイツ人ではない。モロッコから移住した家族の一員である。ドイツの魚屋はほとんどがモロッコ人といわれる。魚の仕入れは、パリ経由で行われていたが、最近になりドイツに仲買の市場が作られた。「ムラビッツ鮮魚店」はムスタファさんの男兄弟4人もこの店を手伝いながらの、従業員10人の中小企業である。若手俳優の青木伸介は調理道具一式を携えて、フランクフルト国際空港に降り立った。彼は俳優でありながら料理には自信があり、ケルンのオフィス街のベートーベン通りにある「ムラベッツ鮮魚店」に乗り込み、店を盛り立てるために一役買おうというのである。

283.「冷戦 (4) ベルリン封鎖（1947―1948年）」〔1999年5月2日・『BSドキュメンタリー・冷戦（24回シリーズ）』・BS1・50分・制作　ジェ

レミー・アイザック・プロダクション／ターナー・オリジナル・プロダクション・1998年・アメリカ〕

敗戦後のドイツは惨憺たる有様であった。国土の四分の一を失った上、東ヨーロッパ諸国を追われたドイツ人難民千数百万人を受け入れなければならなかった。連合国側の憎悪にも激しいものがあった。アメリカ大統領ルーズベルトさえもが、一時はドイツを農業国にした上、南北に分割することさえ考えたほどであった。結局はドイツは、アメリカ・イギリス・フランス・ソ連の４カ国に分割占領されることになった。しかし、そうした分割占領が直接ドイツの分割に結びついたわけではない。言うまでもなくその主犯は冷戦であった。東西対決という冷戦の本質が、地理的に東西両陣営の接点でもあったドイツにおいて一つの国を引き裂くという形で示されることになり、「ベルリン封鎖」に続き東西ドイツ分裂の始まりとなった。

284.「国境紀行・アルザス～２つの国のはざまで～」〔1999年５月４日・BS２・50分〕

アルザスという地名はフランスの作家ドーデの「最後の授業」の舞台ともなった仏独の国境地域である。この一帯は30年戦争まではローマ帝国に属し、1648年の「ウエストファリア条約」で、ルイ14世はこの地を獲得しフランス領になる。1870年、独仏［普仏］戦争でアルザスはドイツ領になるが、第一次世界大戦後の「ヴェルサイユ条約」でフランスは、再び美しい田園地帯を取り戻す。そして第二次世界大戦でドイツ軍に占領されたが、1945年に解放され、現在に至る。ヨーロッパの歴史の渦に常に巻き込まれてきた国境地帯でもある。そしてアルザスの人々にとって「国境」はつねに戦争の象徴であった。戦争のたびに主権が変わり、人々は何度も国籍の変更を余儀なくされた。バランタン・イエルガーさんは、ドイツとフランスの二冊の軍人手帳を今も持っている。イエルガーさんは第二次世界大戦が始まったときはフランス軍に徴兵された。しかしその後アルザスがドイツ軍に占領されたため、今度はドイツの兵士

として徴兵されたのである。イエルガーさんは語る。「軍服を変えるのは簡単なことではありません。何とか3年間フランスの兵士を勤め上げました。村に帰ったら静かに暮らせると思ったのに、すぐドイツ軍に徴兵されました。軍服とブーツとかぎ十字を身につけさせられたのです。軍隊は嫌いです。フランス軍もドイツ軍も」。アルザスには、アルザス語と呼ばれるこの地域特有の言語がある。EU統合の流れの中で、地域文化をいかに守り継いで行くか、アルザス地方にまた新たな課題が突きつけられていると言える。

⇒関連映像資料：**345.「クリスマスのオレンジ」**〔1999年11月28日・『NHK海外ドラマ』・NHK〕本稿の304ページ参照。

285.「M・エンデの遺言～根源からお金を問う～」〔1999年5月4日・BS2・60分〕

1995年8月、世界中で愛されたドイツの作家ミヒャエル・エンデは65歳の生涯を終えた。エンデの死を悼んで、ドイツ大統領ヘルツォークは「現代のドイツ人でエンデの本とともに成長した記憶を持たない人はいない」と心を込めた弔電を送った。現代社会は科学技術が急激に発達し、モノがあふれる時代でもある（ただしごく限られた先進工業国においてであるが）。しかしエンデはその中で人は本当の心の豊かさや生きる喜びを失っているのではないかと問いかけてきた。ミヒャエル・エンデの代表作「モモ」は30以上の言葉に翻訳され、日本でも140万部を越えるベストセラーとして愛読されている。エンデ作品はファンタジーからオペラ・詩・エッセーに至るまで幅広いものであった。エンデは、死の前年、NHKに新しい企画を提案した。それは現代の「貨幣システム」をテーマとするもので、環境・貧困・戦争・精神の荒廃など、現代のさまざまな問題の根源にお金の問題が潜んでいるのではないかというものであった。ミュンヒェンにあるエンデの自宅での事前の打ち合わせにおいて二時間に及ぶ記録テープが残された。「私が考えるのはもう一度貨幣を実際になされた仕事や物の実体に対応する価値として位置づけるべき

だということです。そのためには現在の貨幣システムの何が問題で、何を変えなくてはならないかを皆が真剣に考えなければならないでしょう。それは人類がこの惑星上で今後も生存できるかどうかを決める決定的な問いだと私は思っています。重要なポイントは例えば、パン屋でパンを買う購入代金としてのお金と、株式取引所で扱われる資本としてのお金は、ふたつのまったく異なった種類のお金であるという認識です。」エンデはお金にはいくつもの異なった機能が与えられ、それがお互いに矛盾して問題を起こしていると指摘する。経済評論家の内橋克人氏は、番組の中で、専門家の視点から、いわゆるファンタジー作家のエンデが貨幣経済へ強い関心を抱いていたということに深い感動を覚えたと述べる。番組では、エンデが貨幣の役割を根源的に問い直す手がかりとして、1920年代にオーストリアの地方都市で実験的に始められた「地域通貨」の取り組みを検証しながら、その地域通貨制度が現代世界でどのように継承されているかを紹介していく。また、番組における次のような言及は大変示唆に富んでいる。「マルクスは資本主義の問題点を、多くの個人企業家のかわりに唯一の企業家つまり国家を建てることで解決できると考えた。マルクスの最大の誤りは、資本主義を変えようとしなかったことである。マルクスは国家に資本主義を任せようとした。つまり私たちは過去50年間から70年の間対立する双子を持っていたのである。つまり民間資本主義と国家資本主義であり、どちらも資本主義のシステムでそれ以外ではなかった。マルクスの大きな功績は、経済批判を可能にする概念自体を作り出したことにある…。今日のシステムの一番の犠牲者は環境と第三世界の人々に他ならない。このシステムが自ら機能するために今後もそれらの人々と自然は容赦なく「搾取」され続けるだろう。このシステムは消費し成長しないと機能しないのだから。成長は無から生まれるのではなく、どこかの地域や国がその犠牲になっているからである。歴史に学ぶものなら誰でも分かるように、理性が人を動かさない場合には、実際の出来事がそれを行うのである。私が作家としてこの点で

できることは、子孫たちが同じ過ちを犯さないように考えたり、新たな観念を生み出すことである。そうすればこの社会は否応なく変わるだろう。世界は必ずしも滅亡するわけではない。しかし人類はこの先何百年も忘れないような追い討ちを受けることになるだろう。人々はお金は変えられないと考えているが、そうではない。お金は変えられる。人間が作ったものなのだから。」

⇒関連映像資料：**「続・エンデの遺言～坂本龍一　(1)地域通過の希望　(2)銀行の未来」**〔2001年11月25日・BS 1・120分〕

⇒関連映像資料：**「こころを結ぶ地域通貨・街づくりの挑戦」**〔2001年12月3日・『クローズアップ現代』・NHK・25分〕

286.「September Songs～9月のクルト・ワイル～」〔1999年5月6日・BS 2・90分〕

「三文オペラ」の音楽でよく知られているクルト・ワイルの生涯を、工場の廃墟と記録映像とのコラージュ（張り合わせ）でスタイリッシュに映像化したカナダのテレビ番組（1995年）。ワイルは、1900年バウハウス運動で有名な、デッサウ（Dessau）で、裕福なユダヤ人の子供として誕生。小さい頃からピアノを習い始め、やがて作曲の才能を示し始める。1913年頃から本格的な作曲に取りかかり、1916年「オフラーの歌」を作曲。1917年ロシア革命。1921年　ヒトラーがナチス党党首となる。1924年に女優のロッテ・レーニャと出会い、2年後に結婚、以後ロッテはワイルの死に至るまで連れ添う。1927年ブレヒト原作の「マハゴニー市の興亡」を作曲。1928年には、「三文オペラ」が空前のヒット。これは後にトーキーで映画化される。ワイルの音楽は、現在もなおあらゆるミュージシャンを刺激し、ジャンルを越えて繰り返し編曲・上演されている。なお1998年夏のザルツブルクツ音楽祭では、久々に『マハゴニー市の興亡』が上演された。やがて、ワイルの音楽芸術はナチスの嫌うところとなり反ユダヤキャンペーンの中で批判や中傷にさらされる。1933年ワイルは友人からの連絡で逮捕の危険を知り、その夜ドイツを逃れ、

パリへ亡命する。そしてドイツ国内での彼の作品は上演禁止となる。1935年にアメリカへと渡る。1950年３月19日、ワイルは胸の痛みを訴えて入院。２週間後心臓発作。４月３日逝去。享年50歳であった。彼は次のような言葉を残している。「ぼくが目指したのは純粋な音楽表現だが、現実に背を向け、ぼくの生きた時代の毒を飲み込んだ。そのことは今美しい花を咲かせている」。けだし、ワイルの「セプテンバー・ソング」は名曲である。

⇒関連映像：**336.「歌劇・マハゴニー市の興亡」**〔1999年11月28日・BS２・180分〕本稿298ページ参照。

⇒関連映像：**「幻のオペラ『永遠の道』～楽譜にこめられたユダヤ人の願い～」**〔2001年２月27日・BS１・「ワールドドキュメンタリー」制作：フランクプロダクション2000年・米　50分〕

287.「旅愁」（“September　Affair”，1950・米）監督：ウィリアム・ディターレ。主演：ジョゼフ・コットン、ジョーン・フォーンテーン、ジェシカ・タンディ。

飛行機で偶然知り合った男女が意気投合し、予定を変更して観光目的でナポリに降り立つ。だが、戻りの飛行機に乗り遅れ、二人を置いて飛び立った飛行機は、事故で墜落。二人の名前は死亡リストに掲載される。男は、この機会に妻子を捨てる覚悟をする。女性は新進気鋭のピアニストで、二人は深く愛し合うようになるが、夫の死亡を信じないニューヨークの家族は、イタリアに探しに出かける。ラフマニノフのピアノ協奏曲の甘美な旋律と、クルト・ワイルの哀切をこめた「セプテンバー・ソング」が、理想と現実の相克を時として二項対立的に奏で、また時として二つの曲は溶け合って、この映画の香りをより高いものにしている。（B&W　105分）

288.「お母さん！これが信州です（Mutter, hier ist Shinshu）～ゲオルク・心のアルバム紀行～」〔1999年５月11日・WOWOW・第35回ギャラクシー賞受賞シリーズ・60分〕

WOWOWが年に一度全国のテレビ局が制作したドキュメンタリーの優秀作品を紹介する番組の中で「ギャラクシー選奨受賞」作品として紹介されたもの作品。制作は、信越放送。

ゲオルグ・レナーツ（Georg　Lennartz）は国際交流員として長野市に住み始めて1年3ヶ月。出身はドイツ西部のモーゼル地方で職業は弁護士である。彼の仕事場は長野県国際課で、現在は主に長野冬季オリンピックのための仕事にかかわっている。そのゲオルグは愛用のカメラを持ち、バイクに乗って信州の片田舎を旅する。行く先々で信州の人々の暖かい人情に触れ、いつしか故郷を思い出した彼は、旅から帰ってスナップ写真でアルバムを作り母親に贈ることにした。訪れたところは、南木曽町、天龍村、上村（かみむら）、飯田市、大鹿村、長谷村、立科町。◆旅先で彼は時折り「ガイジンサン」と呼ばれることに、見る側も彼と一緒にいくらかの戸惑いは覚えるものの、ゲオルグの世代と文化を越えた積極的な交流行動に、いつしか見る側も取材するカメラマンの目線で見入ってしまう。そんな番組の構成はよくできている。そしてドイツ人青年の視点を借りながら、信州の風土性やそこに住む人々の暮らし、そして伝統文化を我々自身もいつしか再発見している。とりわけおばあちゃんがじっくりゆでてゲオルグに振舞ってくれるサトイモや、イノシシ鍋。とりわけゲオルグは山村でごちそうになるこの「イノシシ（Eber）」の持つ煮込み鍋に舌鼓を打ち、自分の「オフクロの味」を思い出すところは出色である。そして正月用の黒豆の収穫、手間隙のかかるきのこやりんごの栽培などの生活風景を見るに付けても、日本の食文化は基本的に「元祖スローフード」であることを実感させられる。

289.「よみがえった日本庭園のなぞ」〔1999年5月24日・25日・『地球に乾杯』・NHK・50分〕

20世紀初頭、ウィーンのシェーンブルン宮殿に作られていたという『日本庭園』の誕生秘話をミステリータッチで紐解いていく番組。ハプスブルク家の夏の離宮だった同宮殿の敷地内で、1996年日本風の石庭らしい

石組みを持つ庭が見つかり、修復して1998年５月に再現された。同宮殿の資料からこの庭は1913年に造られたことが判明した。古い庭園雑誌からはある人物が浮かび上がってくる。それをもとにチェコ、ロンドンと調査を進めていくうちに、オーストリアのフランツ・フェルディナンド皇太子を軸にした人間模様が明らかになってくる。番組では、第一次世界大戦前夜の混沌とした時代、造園におけるジャポニスムがどのような経緯で、同宮殿に伝わって行ったかを探っていく。日本の文化を反映させた庭園が、歴史の波に飲まれて忘れ去られ雑草に埋もれてしまったというのは少し不思議でもある。なぜ、宮殿の人たちが石庭に魅了されたのかという動機が今ひとつ明確になっていない点が残念であるが、当時の西欧造園界の潮流が総覧できるところは、映像情報として優れている。

290.「知の巨人たち(1)〜神なき時代を生きる・ニーチェ〜」〔1999年５月24日・『ETV 特集』・ETV・45分〕

20世紀末、政治や社会のシステムが機能不全に陥って、混迷と閉塞の時代と言われるようになって久しいが、こうした時に人は一体どうすればいいのか、我々は安直な答えをすぐに求めようとする。番組では、イギリス BBC のドキュメンタリーを再構成した映像を見ながら、主としてニーチェの思想的遍歴、とりわけニーチェによるキリスト教的価値観の否定の中味、ニヒリズム、「超人」思想の中味を、キャスターの町田俊男がゲストの武田青嗣（明治学院大学）とともに検証していく。ニーチェが生み出した「超人」という言葉は、多義性を含んでいる。「スーパーマン」と訳されることがあるが、これはナチス時代の名残である。ニーチェは死後かなりたってから、ナチスの英雄に祭り上げられた。彼の妹エリーザベトが、著作のいくつかを再編し、アーリア人優越思想に利用したためである。フリートリヒ・ニーチェ（1844－1900）にとって、ショーペンハウアーの理論とともに、重要な影響を与えたのは、リヒャルトヒ・ワーグナーの音楽であった。ニーチェは「トリスタンとイゾルデ」を３度も見に行っている。1870年代、ニーチェはしばしばスイスの

ルツェルン湖のほとりのワーグナーの家を訪れている。ニーチェはこの作曲家の作品の中に、古典ギリシア悲劇にもとづいたヨーロッパ文化のルネサンスの可能性をみていた。ニーチェの「悲劇の誕生」はワーグナーの刺激を強く受け、彼の音楽はギリシアのディオニソスに象徴されるキリスト教以前の世界の理想を表していると主張している。ニーチェは存在の苦しみの哲学的答えを求めていたが、その一方で、慢性的な病気によってどんどん衰弱していた。強度の近眼だったニーチェは、幼い頃から病弱だった。普仏戦争に看護兵として従軍したとき、赤痢とジフテリアに係り、また学生時代に売春宿で梅毒に感染したといわれている。30歳になる頃、ニーチェは半病人になっていた。ニーチェの病気は彼の人生を大きく変えるものとなる。1876年、バイロイトでのワーグナー祝祭劇場での初日、ニーチェは原因不明の病気のため、第一幕が終わると劇場を後にした。ニーチェとワーグナーの交遊は当時すでに壊れかけていた。しかしこの途中退場は、2人の糸を断ち切った。そしてニーチェの哲学の旅は44歳にして狂気のブラック・ホールへと陥っていく。

⇒関連映像資料：291.「ワーグナーとコジマ」(“Wahnfried/Richard und Cosima” フランス＝西ドイツ)

監督：ペーター・バツァック。ワーグナー（オットー・ザンダー）、コジマ（ターチャ・サイプト）ニーチェ（クリストフ・ヴァルツ）。これまで数多くの映画に登場してきた19世紀の作曲家ワーグナー。そして夫のある身でありながらワーグナーの元へ走ったフランツ・リストの娘コジマ。彼女はワーグナーに永遠の愛を誓って以来15年間、妻として使えながら夫を支配しようとしたが、彼の生活に愛人が絶えることは無かった。二人の愛と憎しみに満ちた結婚生活を描きながら、奔放に生きた人間としてのワーグナーに迫っていく。（108分）

「映画のシナリオ」から一部引用：（湖）。ボートをこぎ、岸に近づいてくる男がいる。ニーチェである。彼の声が画面に重なる。『ワーグナーは私をよく知らず、私も私自身を知らなかった。だが私は彼を愛し、

彼の音楽に心酔しきり、その魅力のとりこになっていった。湖畔の家で、私は一人の女性に出会った。その輝きと威厳。私は一瞬逃げ出したくなった。だが次の瞬間、こう思った。「何があろうともこの女性のそばにいたい。そして彼女に会いたい。何度も、何度も、繰り返し」。白い服、白いベールでワーグナーの横に立つコジマに気を取られていて、勢いよく桟橋にボートをぶつけてしまうニーチェ。ワーグナーが手伝い、彼を岸に下ろす。「落ちないでくれよ、教授」。ワーグナーはニーチェにコジマを紹介する。

292.「知の巨人たち(2)〜生きることの不安・ハイデガー〜」〔1999年5月25日・『ETV特集』・ETV・45分〕

番組の冒頭では、マルティン・ハイデガー（1889−1976）の撮影フィルム〔1969年）が紹介される。「今の時代思考に向き合う仕事は、ある意味で前例の無いものである。その新しい形とは、今まであった伝統的な哲学立場と比べて容易であると同時に困難でもある。なぜなら言葉の使い方によりいっそうの配慮が要求されるからだ。」哲学者ハイデガーはその生涯のほとんどを南ドイツの黒い森ですごした。彼の死後20年がたち、彼は今なお多くの人々に尊敬され、多くの人々に批判され続けている、その毀誉褒貶のよって来るところはなんだったのか。批判が、彼の哲学の中味ではなく、ナチス加担という政治的要因に基づいていることはつとに知られている。果たして彼はどのような理由により、20世紀において最も非道といわれた政治運動に加担することになったのか。スタジオでは、前回のニーチェと同様に、武田氏をゲストとして迎え、ハイデガーだけではなく、思想・哲学とファシズムを含めた政治権力とのひそかな共犯関係について検証して行く。

ハイデガーがマールブルク大学で行った哲学の講義に強い感銘を受けた女性がいた。ユダヤ人のハンナ・アーレントである。後にナチスに対する批判で世界的な名声を得るハンナはやがてハイデガーと愛を交わす間柄となるが、その関係は長くは続かなかった。1933年1月30日、アド

ルフ・ヒトラーはドイツの首相に就任、ただちに公職からユダヤ人を追放するという「アーリア化」が始まる。4月末にはフライブルク学長が、ナチスの政策に反発して辞任。次の学長選挙の候補者としてハイデガーの名前も挙がった。投票の結果ハイデガーが学長に選ばれた。しかし、本来なら投票権を持つ教授13人が、ユダヤ人であることを理由に投票を許されなかった。5月1日、ハイデガーは正式にナチスに入党した。哲学者ハイデガーが、ナチスの思想に傾倒して行った理由は、はたして何だったのか。番組の後半では、ハイデガーとナチスの関係について検証して行く。手がかりとなるキーワードは、やはり「反ユダヤ主義（アンチ・セミティズム）」であることは間違いない。ハイデガーは忠実な党員であり続け、「密告」まで行っている。最も有名な例は、後にノーベル賞を受賞する化学者ヘルマン・シュタウディンガーである。ハイデガーの捏造情報によってシュタウディンガーはゲシュタポの厳しい監視の下に置かれたのである。

293.「音楽のふるさと～ドイツ・ザクセン～」〔1999年5月24日・『シャルル・デュトワの若者に贈る音楽事典』・ETV・60分〕

シャルル・デュトワは、NHKの音楽監督、あわせてモントリオール交響楽団カナダとフランス国立管弦楽団の音楽監督を努めている。現在世界で最も活躍している識者の一人。シリーズ番組の今回は、バッハの活躍した都市ライプチッヒ、ワーグナーの活躍したドレスデンを訪ねる。ドイツ・ザクセン州（旧東ドイツ）は深い森に覆われている。かつてここはザクセン王国と呼ばれ、1870年のドイツ統一以前は、小国が群雄割拠するドイツでも屈指の大国の一つであった。ライプチッヒ、ドレスデンはドイツ音楽発祥の地であり、またヨーロッパのクラシック音楽の基礎を形作った都市でもある。近代音楽の父とも言われるバッハ（1685－1750）は、ライプチッヒの教会で半生を過ごした。ドレスデンのゼンパーオーパー（Semperoer）は、かつてのザクセン宮廷歌劇場である。ここではリヒャルト・ワーグナー（1813－1883）が楽長となり、自らの

作品を含めドイツオペラの確立に勤めた。また、ウェーバーは小さな森の小屋で歌劇「魔弾の射手」を作曲した。現在ここは「ウェーバー記念館」となっている。ドイツでは長い間ドイツ語によるオペラが待ち望まれていた。カール・マリア・フォン・ウェーバー（1786－1826）はドイツに伝わる民話を元にして、歌劇をつくりその後のドイツ音楽に大きな影響を与えることになった。歌劇「魔弾の射手」の中の「狩人の合唱」は第二の国歌とも言われている。バッハが半生を過ごしたライプチッヒ、プロテスタントの影響の強いこの町は、古くから商業の町として栄えてきた。市民が運営するオーケストラとしては世界で最も古い「ゲヴァントハウス・オーケストラ（Gewandthaus Orchester)」は、バッハの時代の「コレギウム・ムジーク」を母体にライプチッヒで誕生した。そして「聖トーマス教会」はバッハが生涯を通じて最も重要な活動をした拠点である。教会内にはバッハの墓がある。このお墓が再発見されたのは死後だいぶたった19世紀末のことである。「トマーナー・コーア」は聖トーマス教会付属の合唱団で、バッハの時代と同じように運営され、9歳から18歳までの少年たちが共同生活をしながら厳しい練習をしている。現在のトーマス・カントール（音楽指導監督）はビラー教授で、バッハから数えて16代目にあたる。

294.「ナチ・ハンター～アイヒマン追いつめた男～」〔1999年5月24日・25日・ETV・90分〕

1960年5月11日、南米のアルゼンチンの首都ブエノスアイレス。自動車工場に勤めるリカルド・クレメントは帰宅途中何者かによって誘拐された。男たちは誘拐したクレメントを秘密のアジトに連れ込んだ。男たちはそこでクレメントに名前を問い質す。腕にはナチスの党員番号の刺青を焼きごてで消した痕跡があった。男たちはさらに追及する。「ナチスの党員番号を言え」クレメントは答えた。「899895」。「分かっているんだ、クレメント、本当の名前を言いたまえ」。「私は、アドルフ・アイヒマンだ（“Adolf Eichmann, Ich bin Adolf Eichmann”)」。

アドルフ・アイヒマン、ナチス・ドイツ親衛隊中佐、第二次世界大戦中ナチス・ドイツはユダヤ人に対する計画的な殺戮を推し進めた。ユダヤ民族の抹殺は、「最終的解決」と呼ばれ、およそ600万人に上るユダヤ人が強制収容所で命を奪われたという。戦後、この20世紀の狂気が暴かれた時、一人の男の名前が浮かび上がった。ユダヤ人虐殺を計画、そしてそれを指示した男であった。戦後アイヒマンはナチスドイツ第一級戦犯として指名手配された。しかし、アイヒマンは戦後15年もの間追及を逃れ、アルゼンチンに潜伏していた。戦後、かなりの数のナチス関係者が、時にはカトリックの総本山バチカンを通して、当時親ドイツ的であったアルゼンチンに脱出したと言われている。このアイヒマンを追い詰め逮捕したのは、アメリカのCIAをしのぐと言われるイスラエルの諜報機関「モサド（Mossad)」である。首相直轄の組織であるモサドはこの事件の全貌を秘密のベールに包んできた。しかし、逮捕から30年を経た1990年、一人の男が「アイヒマンを我が手に（Eichmann in my hands）」という著書を発表した。著者は、ピーター・Z・マルキン（Peter Z. Malkin）で、元モサドのメンバーの一人で、自分の手でアイヒマンを逮捕した男である。そこに書かれているのは当事者しか知り得ない生々しい真実、彼は今ニューヨークに暮らしているという。番組制作者たちは、彼と取材交渉を開始した。粘り強い交渉の後、ようやく彼は会っても言いと返答してきた。彼が待ち合わせの場所にしてきたのは散歩コースにしているという、遠くに国際貿易センター（WTC）を望むブルックリン橋の上であった。アイヒマンの話を聞かせてくださいという取材スタッフの単刀直入な依頼に対し、彼は答える。「とても大きな物語です。何から話したらいいか」。彼の自宅にはアイヒマンを逮捕した時の皮手袋が今もレリーフとなって大切に飾られている。そして、彼は逮捕の全貌をおもむろに語り始めた。

◆番組は、NHK独自の取材により構成されているが、いかには番組のクレジットで紹介された撮影協力諸機関名を掲載しておく。The Steven

Spielber Jewish Film, Archives of the the Hebrew University of Jerusalem and the Central Zionist Archives, Herzliya Studio Ltd., Panstwowe MuzeumOabsOswiecim Brzezinka, Haus der Wannsee-Konferenz Berlin, Dokumentationszentrum des Bundes judischer Verfolgter des Nazi-Regimes、国立アルゼンチン資料館。

⇒関連映像資料：**「言葉～アイヒマンを捕らえた男～」**〔2003年２月18日・BS2. 脚本：山崎正和・150分〕

⇒関連映像資料：**「スペシャリスト・自覚なき殺戮者」**（“Une Specialiste” 仏＝独＝ベルギー＝オーストリア＝イスラエル、1999年〕1961年のイスラエルで行われた彼の戦争犯罪をめぐる裁判の模様を国名に記録したドキュメンタリー。（128分）

295. **「ゴールデンボーイ」**（“Apt Pupil”、1998年・米）制作監督：ブライアン・シンガー。〔1998年７月16日・WOWOW（JSB 日本衛星放送）にて放送。

「世界中で少年犯罪が頻発しているが、とくにアメリカでは若年者の犯罪が増加し、社会問題になっている。コロラド州の高校で起きた銃乱射事件は、ちょっと信じられないほどショッキングだった。容疑者の二人はナチスに心酔していたというが、なぜ現代の若者が半世紀前のナチスに感化されたのか、理解に苦しむ事件でもあった。ここで紹介する映画「ゴールデンボーイ」は、高校生の銃乱射事件と無関係ではない。なぜならナチスの残虐な犯罪に興味を持った少年が、自ら犯罪を犯す過程を描いているからだ。」〔映画評論家・垣井道弘氏「公明新聞」1999年６月18日より引用〕

ミステリーの第一人者、米国のスチーブン・キング原作の映画で、監督は「ユージュアル・サスペクツ」のブライアン・シンガー。ハリウッドでも屈指の美少年で端正なマスクの少年ブラッド・レンフロは、この作品で1998年の東京国際映画祭・主演男優賞を得た。英国のベテラン俳優イアン・マッケランを相手に、二人芝居のような緊張感を生んでいる。

主人公の高校生トッド・ボウデン（ブラッド・レンフロ）は、ロサンゼルス郊外の住宅地で両親と暮らして成績優秀でスポーツ万能の彼は、学校の授業で教わったホロコースト（ナチスのユダヤ人虐殺）に好奇心をかきたてられ、図書館に通うようになる。そんなある日、トッドは近所で孤独な老人クルト・ドゥサンダー（イアン・マッケラン）を見かける。元ナチス将校でアウシュヴィッツの副所長だったクルトは、偽名を使ってアメリカにわたり、人目を避けながらひっそりと生きてきた。クルトの家に忍び込んだトッドは、ホロコーストの写真で見たナチス将校がクルトに違いないという自分の推理に確信を持った。頭脳優秀なトッドは、緻密な調査を重ね、脅しのテクニックまで身に着けていた。戦後、ずっと追っ手を逃れてきたクルトは、少年相手に自分が戦犯ドゥサンダーだと白状せざるを得なくなる。トッドの望みはホロコーストの真実をクルト自身の口で語らせることだった。人を死に追いやるとはどういうことなのか、クルトの話をトッドは夢中になって聞き入る。さらにナチスの制服を買い込んで、クルトに無理やり着させてみたり、さらに残虐な話を強要していくうちに、自分の内側で得体の知れない黒い衝動がうごめき始め、もはや歯止めの利かないところまで来てしまう。学校の歴史の授業でホロコーストを教え、検証するという作業に誤りは。問題はいかに教えるかということにあるのかもしれないが、ナチスの亡霊は、好奇心旺盛な少年の心に潜む悪を密かに呼び覚ますこともあるかも知れないという暗澹たる恐怖心が観る者を襲う。

296.「ヴュルツブルクのレジデンツ、その庭園と広場」〔1999年6月20日・『世界遺産』第158回・BSN＜TBS系列＞・30分〕

ドイツ・ロマンチックロマンチック街道（die deutsche romantische Straße）の北の出発点が人口13万人のヴュルツブルク（Würzburg）である。ライン川の支流であるマイン川が町の中心部を流れてるいる。このあたりは、バイエルン州のフランケン地方といわれ、ぶどう畑が丘の斜面を覆いつくしている。ちなみにヴュルツブルクに近いところにある

フランクフルト・アム・マイン（Frankfurt am Main；マイン川沿いのフランクフルト）は「フランク人（フランケン）の渡し場」という意味である。このフランケン地方ではドイツのワインの６％が生産されている。大司教の居館レジデンツは、1720年から約30年かけて造られた。ドイツ・バロック建築の最高峰といわれている。ドイツの50マルク紙幣にはこの居館を設計した建築家が描かれている。彼の名はバルタザール・ノイマンで、彼は生涯をかけてレジデンツの造営に取り組んだ。レジデンツの地下にはワインケラーがあり、そこには直径5.5メートルの巨大なワイン樽が置かれている。これほど巨大なワインが必要だったのは、当時大司教のもとで働く人々には、給料の代わりとして一人４リットルのワインが支給されていた。小さいワイン樽ではワインの出来不出来が違うため、その不公平さをなくすために巨大な樽が作られた。レジデンツの中に「階段の間」がある。建築史上まれに見る壮大かつ洗練された空間である。バロック様式の美しい階段の真上にそびえるのは、世界最大の天井画である。長さ30m、幅19m。この巨大な天井を作り出すために、ノイマンは当時としては斬新な鉄を構造材に取り入れ、周囲の人々を驚かせた。フレスコ画は、イタリアの画家ティエポロの作品。地球の４大陸の人々が大司教を祝福する様子が描かれている。（英語名：Wurzburg Residence with the Court Gardens and Residence Square" 登録年：1981年）。

297.「ハンザ同盟の都市リューベック」〔1998年４月５日・**『世界遺産』**第98回・BSN＜TBS系列＞・30分〕

前回の論文で掲載もれとなった「世界遺産」ドイツ関連番組であるが、ここに追加して掲載する。　バルト海（Ostsee；ドイツ語では「東海」）へ注ぐトラーヴェ川の河口からおよそ20キロ、そこに自治と独立の空気にあふれたかつての自由都市リューベックがある。リューベックは、中世のバルト海貿易を独占した「ハンザ同盟」の中心都市で、旧市街にはハンザ同盟に関係した多くの史跡がある。さらに、この都市は20世紀の

ドイツを代表する作家トーマス・マン（Thomas Mann）と深く結びついている。マンは、リューベックの豪商の家に生まれ、19歳でミュンヘンに引っ越すまでの多感な少年時代をリューベックで過ごした。実家をモデルに書いた長編小説「ブッデンブローク家の人々～ある家族の没落～」は世界的に高い評価を受け、マンは1929年ノーベル文学賞を受賞した。13世紀から17世紀までの「ハンザ同盟」が存続した時代はリューベックの最盛期でも会った。リューベックの旧市街には、今もバルト海貿易で活躍した豪商の家が残っている。商家にはレンガ造りの立派な「破風（Giebel)」がつけられている。リューベックは、「七つの塔の町」とも呼ばれている。旧市街には、5つのゴシック建築教会の7つの尖塔がそびえている。中でも一番大きいのが聖マリーエン教会。ここにはかつてヨハン・セバスチャン・バッハがその音を聴くためにやってきたと言われる巨大なパイプオルガンが今も残されている。（英語名：Hanseatic City of Lubeck、登録年：1983年）

⇒関連映像資料：298.「Die Manns（マン家の人々）」

2001年、ドイツのテレビで放映されたトーマス・マンの伝記ドキュメンタリー。

299.「ヨーロッパと日本～自画像と相互認識～」〔1999年6月11日・『金曜フォーラム』・ETV・70分〕

1989年11月9日、ベルリンの壁が崩壊し、翌年にドイツは統一された。ヨーロッパではこれを契機に、冷戦時代には考えられなかった国を越えた統合：「EU」設立への機運が加速し、1991年に「マーストリヒト条約（欧州連合条約)」が採択される。さらに1999年に入りEU統一通貨「ユーロ（EURO)」が誕生、21世紀に向かってヨーロッパの国々は結びつきを強めている。一方、ヨーロッパと日本は、400年前の織田信長の時代から交流してきたにもかかわらずお互いの認識はいまだに古い固定概念に縛られ、ステレオタイプ的なイメージから抜け出せない状況にある。6月11日、国際交流フォーラム（東京）において、お互いの理解

をより深める目的で、シンポジウムが開催された。そのシンポジウムの第三部の総括的なパネルディスカッションの内容を70分の番組枠で紹介するもの。パネリストは以下のとおりである。ヨーン・オーストロム・モラー：駐在シンガポール大使（デンマーク）、カイ・ニエミネン：日本文学研究者（フィンランド、ペン・クラブ会長）、ホルヘ・センプリン：作家（スペインの元文化大臣）、ボー・ストロッツ：ヨーロピアン・ユニバーシティー（スウェーデン、言語が現代社会に及ぼす影響の研究）、鹿島滋（共立女子大学、19世紀フランスの社会生活と当時の小説の研究）、田所昌幸（防衛大学校、国際政治学専攻で国際社会で形成される日本のイメージについて考察）、田中明彦（東京大学東洋文化研究所、国際関係論専門で特に冷戦の終焉と世界システムの研究）、コーディネーター：山崎正和（劇作家・評論家）、コーディネーター：ヨーゼフ・クライナー：ボン大学教授（オーストリア、ドイツ日本研究所の初代所長）。シンポジウムの論点：ヨーロッパの捉え方（統一性と地域性・多様性の理解）、欧州の統一で起きている新たな問題。文字メディアから映像メディアのボーダーレス時代における他者（外国）イメージ形成の仕方の変化、ナショナリズムを越える他者（外国）と経済的利害の関係性、情報共有と世界理解の共有（マスメディアの役割）、アイデンティティーとグローバリゼーションの概念・用法の再検討（可能性と危険性）。

上に述べたさまざまな問題点は、いずれも大変知的好奇心をそそるものである。シンポジウムの中でこれらの問題にすべての参加者が共有する解答が導き出せたわけではないが、ともあれ、大変挑発的なシンポジウムであることは、映像から十分伝わっているように感じられる。もう一つ指摘しておきたいのは、「ヨーロッパと日本」という論題を設定するとき、それは一国対一国の対応関係にはないということである。ヨーロッパをさしあたりEUという概念でくくるとしても、その実態はあくまで「多」であり、ヨーロッパ文化の多様性はひとくくりにできないの

である。

300.「スパイ・終わりなき情報戦～フレデリック・フォーサイス～」〔1999年6月27日・「21世紀への証言」・BS1・60分〕番組のキャスター：今井義典、ナレーション：広瀬修子。

冷戦時代、世界を覆いつくした核の脅威。資本主義と社会主義が激しくぶつかり合った冷戦は、45年もの間続いた。民族と民族の対立、相次ぐ紛争、20世紀の後半国際情勢は常に緊張状態にあった。その恐怖と不安の時代を見つめ、小説に描き続けてきた一人の作家がイギリスの作家フレデリック・フォーサイスである。フォーサイスは1971年フランスのドゴール大統領の暗殺をテーマにした「ジャッカルの日」でデビューした。これは世界的なベストセラーとなり、アメリカで映画化された（1973年）。ドゴール大統領の命をつけねらい着々と準備を進める暗殺者ジャッカル、正体不明の暗殺者を追い詰めるフランスの捜査隊、ヨーロッパを舞台に繰り広げられる国際犯罪を描いたこの作品は、どこまでが事実でどこまでがフィクションかという論争まで引き起こした。歴史の事実とフィクションがたくみに折り合わされたフォーサイスの作風は、「ドキュメンタリー・スリラー」と呼ばれる。それまでの作家では到底書き得ない小説のスタイルとして世界的な評価を受けた。彼の作品の多くは、国際政治の裏舞台で活躍するスパイを題材にしている。番組の冒頭でフォーサイスは語る。「平和を望むならば、脅威に対する防衛手段を持たなければなりません。それがスパイなのです。スパイは死んではいません。今後も諜報活動が必要なのです」。

番組は、ロンドンのテームズ河畔に立つ経つイギリスの秘密諜報機関SISの本部、通称MI6とも呼ばれるこの諜報機関は90年前に創設された。戦後は冷戦時代を通じてアメリカのCIAと並んで、西側の代表的な対外諜報機関として機能してきた。だがイギリス政府が始めて公式的にMI6の存在を認めたのは、冷戦終結後の1993年のことである。現在では事前の厳しい審査と条件つきではあるが、建物の外観だけはテレビ

取材が可能となった。外交交渉から戦争に至るまで国際政治の裏に影のように存在してきたスパイ、これを題材にした小説はイギリスのお家芸ともいえる。19世紀以来イギリスから多数のスパイ小説家が誕生した。そうした文学的伝統の延長線上で、フォーサイスは、緊張の耐えることのない世界情勢をジャーナリストとしての目で見つめ、ジャーナリストならではの事実の積み上げを巧みに生かしてサスペンスあふれる物語を書き続けてきた。サスペンスすなわち「緊張感」がエンターテイメントの一つの要素であることを認めるとき、我々は映像によるサスペンス表現の代表的映画監督アルフレッド・ヒッチコックも同時にイギリス出身であることを容易に想起できる。

⇒関連映像資料：（301.～303.）

301.「ジャッカルの日」（“The Day of Jackal”, 1973年・米）監督：フレッド・ジンネマン。

フォーサイスの出世作となった同名小説の映画化。フランスのドゴール大統領暗殺をもくろむ殺し屋「ジャッカル」の、謀略決行と失敗までの行動を描く。付随的なストーリーをそぎ落として、簡潔で冷静な映像カットの積み重ねで緊迫感を盛り上げる社会派サスペンスの秀作。（142分）

302.「オデッサ・ファイル」（“The Odessa File”, 1974年・米）監督：ロナルド・ニーム。

1963年、ハンブルクでルポライターのミラーは、自殺した老人の日記から偶然に元ナチスの殺人組織「オデッサ」の存在を知り、その実態を探り始める。元収容所所長ロシュマン大尉の行方を追うミラーはついに彼を突き止める。ドイツ人のミラーが執拗なまでにロシュマンの正体を暴こうとする意図は、単なる「ナチ・ハンター」の真似事としてではなく、もっと深い個人的理由があったことが映画の終わりにようやく明らかとなる。（129分）

303.「戦争の犬たち」（“The Dogs of War”, 1980年・米）監督：ジョン

・アーヴィン。

西アフリカの独裁国を舞台に、英国の資本から政権転覆を依頼された4人の戦争プロフェッショナルが暗躍するドラマ。フォーサイスは、かつて自ら私兵をを雇ってアフリカの地域紛争に極秘に介入したといううわさが上ったほどの人物である。フィクションの隙間に垣間見る歴史的事実のリアリティというときに、この作品はフォーサイス的世界をもっとも正確に映像化しているとも言える。

304.「シリーズ20世紀を駆け抜けた作家たち　(1)ヘルマン・ヘッセ～再生を果たした夏～」〔1999年7月5日・ETV・45分〕　解説：田中裕（ドイツ文学者、ヘルマン・ヘッセ研究会副会長）

1919年4月一人のドイツ人がスイスのベルンから南へ向かう旅に出た。42歳の作家ヘルマン・ヘッセ（1877－1962）である。それまでの人生と文学の歩みに限界を覚えたヘッセは新しい世界に出会うために南へ向かった。この番組はスイス・テレビが、1987年ヘッセの死後25年を記念して製作されたドキュメンタリー。このシリーズのほかの2つの番組は以下の通りである。(2)アルベール・カミュ～誠実という狂気　(3)トルーマン・カポーティ～疾走の人生～。

305.「ドイツ平和村、戦場から来た子供たちに…東ちづるが出会った」〔1999年7月11日・『世界ウルルン滞在記』・BSN・55分〕

日本骨髄バンク協議会のボランティア活動にもかかわっている女優の東ちづるは、ドイツ・オーバーハウゼン市にある「国際平和村」を訪れる。この施設は、1967年ベトナム戦争のさなか戦場で傷ついた子供を救う運動から始まった。0歳から14歳までの子供たちをドイツの病院に連れてきて手当てをしたあとで、ここでリハビリを行い再び母国に帰すというNPO組織である。世界の各地の紛争地域で地雷や爆撃で傷ついたり、あるいは目の前で両親を殺された子供などが今も収容されている。運営資金はすべてボランティアに頼っており、現在は8カ国150人以上の子供たちがここで生活している。日本からも3人のボランティアが活

動に参加しているが、平和村では精神的なケアを重点においている。東ちづるは、自らの「国際平和村」での体験を本にまとめている。（『わたしたちを忘れないで』ブックマン社、2000年）

ドイツ西部の町オーバーハウゼンにある国際平和村を訪れた東ちづる。ここでボランティアとして母国で治療が受けられない子供たちの面倒を見る。ホームステイ先のフェレーラさん家族から「村の活動資金はほとんど寄付によって支えられているが、ここ数年資金不足に悩んでいる。日本の有名な女優である東さんに、募金活動を手伝ってもらえないか」と相談をもちかけられた。東ちづるのプロフィール：広島県出身。テレビ、ラジオ、舞台など多方面で活躍中。10／4からNHKの連続テレビ小説『あすか』レギュラー出演決定。エッセイ集『たいくつのパラダイス』（双葉社）。

ドイツでは、ボランティア活動に参加することは名誉をともなっており、現在国民の40％がボランティア活動を行っている。国と協会がバックとなりボランティア活動を行う実施機関として「連邦ボランティア社会福祉事業機関」が設置され、ボランティアに参加したい人の受け皿となっている。17歳から25歳までの若者に対してはＦＳＪ（自発的社会奉仕の年）という政府から支えられているシステムがある。このＦＳＪにボランティア活動をしたいと申請すると、１年間ボランティアとして働ける。そうすると、ボランティアの為の宿泊代と食事代が無料となり月に200マルク（約１万6000円）のお小遣いが出る。徴兵制を行っているドイツでは、男性は18歳になると10ヶ月の兵役の義務があるが、それを拒否する人には12ヶ月のボランティアが義務づけられている。

306.「検証・介護保険先進国ドイツ」〔1999年７月18日・BS１・60分〕

長期的に安定した介護システムを作ることを狙いとして、ドイツでは1995年に公的介護保険制度を導入し５年が経過した。ドイツの介護保険制度は、国民全員が介護保険料を払い、介護が必要になったときに給付を受けることができる制度である。高齢化が進み。増え続ける介護費用

を社会全体で負担するものである。自宅で生活を続けたい場合は、在宅介護サービスを受けることができる。代わりに現金を受取って、家族が介護してもかまわない。施設においても介護にかかる費用は介護保険が負担することになった。現在給付を受け取る人はおよそ180万人で、介護保険は介護を必要とする人々の家族の助けとなっている。しかし、現場では介護保険に対する戸惑いも広がっている。在宅介護を行うスタッフからも以前よりも介護に当てられる時間が短くなり、ゆとりが少なくなったという声が聞かれる。介護プランをきちんとやろうとするとどうしても時間が足らないという不満の声も出ている。一方、介護の「質」も問題になっている。ミュンヒェンでは昨年から専門家による介護施設や在宅介護サービスへの立ち入り調査が始まった。また、サービスを申請した4人に一人は却下されている。また、サービス単価が低く設定されているため、給付額の不足分を自己負担で補う必要もでてきている。そんな中、消費者センターが介護サービス業者の格付けを始めるなど「介護の質」の確保に向けて取り組みが続いている。介護保険によって、介護を取り巻く社会的状況はどのように変化するのか。日本でも2000年4月から導入される介護保険のモデルになったといわれるドイツの現状を検証する番組である。

307.「ランメルスベルク旧鉱山と古都ゴスラー」〔1999年7月18日・『世界遺産』第162回・BSN＜TBS系列＞・30分〕

ドイツ中部のハルツ（Harz）山地、4月の最後の夜に魔女たちはハルツ山地の最高峰ブロッケン山に集い、魔王を囲んで宴を繰り広げたという伝説が今も伝えられている。魔女伝説を生んだこのハルツ山地は、不思議な魅力をわれわれに伝えてくれる。ハルツ山地では10世紀ころから銀の鉱脈が発見された。このランメルスベルク鉱山の採掘工場も世界遺産の一つになっている。宮殿のようなシンメトリーの配置と構成が印象的である。この鉱山は1000年もの長い間掘り続けられ、これだけの規模と歴史を誇る鉱山は他に類を見ない。10世紀初頭に生まれた町ゴスラ

ー（Goslar）は、ランメルスベルク鉱山の採掘の拠点として発達し、時の神聖ローマ皇帝はここに城を築いた。1200年頃には、北ドイツでも豊かな町となった。この古い町にはとくに16世紀頃の建物が当時と同じ姿で残っている。この玉座は、1600年頃造られたといわれている。当時としては非常に珍しい青銅製で、まさに鉱山の富で潤った皇帝の権勢を物語る。魔女たちが住むハルツの森から掘り出された銀、鉛、銅などは、魔女以上に強大な権力をこの地にもたらした。(英語名：Mines of Rammelsberg and Historic Town of Goslar，登録年：1992年)

308.「ベルリン・空間芸術家の挑戦～梱包された旧帝国国会議事堂～」

〔1999年8月6日・BS1・90分〕

梱包芸術家クリストとジャン＝クロードが1995年6月に実現させたアート・プロジェクト「梱包されたライヒスターク（旧帝国議会議事堂)、ベルリン、1971－1995」の過程を追ったドキュメンタリー映画である。二人によって梱包されたオブジェの展示期間はわずか数週間であるのに対して、オブジェが公共建築物であるため地区行政からの許可を取り付けるのに膨大な時間がかかることにより、プロジェクトの期間全体が長いものとなっている。たとえば、二人が1975年に構想したパリ、セーヌ川にかかる橋「ポン・ヌフ（新橋)」の梱包が実現したのは10年後の1985年であった。ドイツ人の若手ドキュメンタリー作家であるヒーセン兄弟の監督によるこの映画は、これまでのクリストたちの梱包芸術の中でも、最大規模の作品を疑似体験させてくれると同時に、「彼らの作品が人々をひきつける魅力がどこにあるかを考える良い機会を与えてくれる。…映画『議事堂を梱包する』は、アーティスト側の要望により、最後の15分間は完成したプロジェクトの美しい姿をさまざまな光の元、アングルで捉えている」(アートライター：柳正彦)

309.「戦争と平和のはざまで～欧州平和大学に集う世界の若者たち～」

〔1999年8月12日・BS2・50分〕

オーストリア東部にあるシュライニング城。毎年、この中世の古城に、

世界中から30人の若者が集まってくる。じつはここは「欧州平和大学」と呼ばれるNGO研究機関である。春と秋、それぞれ3ヶ月の間研究生たちが「戦争と平和」について学ぶ場となっている。さらに奨学金制度も設けられている。この大学の研究生は、アジア、アフリカ、中南米など、自国に地域紛争などの深刻な政治問題を抱えた地域を中心に集められ、1学期ごとにメンバーは変わる。職業も学生、軍人、外交官、ジャーナリストとさまざまだが、現代の「戦争と平和」についてそれぞれの主張を持ち、次代の平和を担うと期待される人ばかりである。集まったメンバーたちは、コソボ紛争やルワンダの難民問題など、実際の国際紛争を題材にして、問題解決のための議論を展開。自国に問題を抱える若者や、敵国として対立する国の若者同士も、ゼミ形式の講義に参加して議論を繰り広げる。彼らは戦争をどのようにして解決しようとしているのか。机上でありながら、決して空論ではない彼らの議論から、「戦争と平和」について考える。

310.「地球の暮らし方　ドイツ・バイエルン～花が心を結ぶ街～」〔1999年8月13日・BS2・60分〕

日本人家族が海外での生活を体験し、異文化への理解を深めていく過程を描くシリーズ。今回は京都在住の名古光夫さん・比加里さん夫妻と、生後8ヶ月になる娘の梨生さんのお一家がドイツへと向かう。夫婦の長年の夢はフラワーショップを営むこと。光夫さんは現在、京都の店で修行中の身である。比加里さんもフラワーアレンジメント教室に通っている。二人は花の品質管理や育成技術に定評があるドイツで、さらに勉強を積もうと奮闘する。夢に向かって団結して進む家族の姿をドイツで追う。

311.「橋（“Die　Brucke”）」〔1999年8月22日・『衛星映画劇場』・BS2・120分〕

1950年代後半から60年代にかけて、比較的多くの「西ドイツ映画」が日本で公開された。西ドイツは戦後の「経済奇跡」と呼ばれる復興期、

日本も東京オリンピック（1964）に向かって経済成長を続けていた時期である。ナチス時代に多くの映画人がドイツを去って行ったために、戦後のドイツは見るべきものが無かったが、経済復興期になって「郷土映画（ハイマートフィルム：Heimatfilm）」というジャンルでくくられる映画が登場する。いわば「ふるさとの人の心は温かい」式の人畜無害な、そしてあたかも戦争の傷跡が消えてしまったかのような「朗らかでほのぼのとした映画」を指している。もちろん、それは敗戦国ドイツの未来への明るい希望を象徴するものでもあった。そんな中で、この映画は異色であった。それはかつての戦争の不条理を真正面から見据えた戦争映画である点にある。ドイツのとある小さな村、ドイツ軍の敗色も日増しに濃くなってくる中で、村の愛国的な少年たちは軍服に身を包み村の橋を守る任務につく。やがて彼らが愛してやまない橋は、戦術上の理由から爆破されることになったが、少年たちは納得がいかない。やがて連合軍の戦車が村にやってくる。少年たちは、橋を守るか破壊するかのディレンマに立たされる中、一人また一人と命を落としていく。あと数日もすれば終戦を迎えるというのに。監督のベルンハルト・ヴィッキはこの映画の撮影後、連合軍のノルマンディー上陸作戦をセミ・ドキュメンタリー風に仕上げた20世紀フォックスの戦争大作「史上最大の作戦」のドイツ側エピソードの監督に抜擢されている。

⇒関連新聞資料：「日独の差　映画『橋』を見た。終戦直前に召集されたドイツの高校生たちが、ささいな行き違いから大人たちに無益な戦いを挑む。戦争の狂気、むなしさを描く秀作だった。ドイツでは1959年にこんな映画が作られていた。戦後の日独両国政府、国民意識の差を見た思いだ。［千葉県主婦【姓名は省略した】］（『朝日新聞』1999年８月22日「はがき通信」）

312.「夢のフラワーパフォーマンス～花舞台の演出家たち～トーマス・グレナー　ザルツブルク音楽祭を飾る～」〔1999年９月２日・BS２・50分〕

ザルツブルク音楽祭の舞台が初めて花で飾られた。今回この音楽祭で華麗な花のパフォーマンスを繰り広げるのは、ドイツを代表するフラワー・アーチストのトーマス・グレナーさん。これまでブーケづくりから造園、ショーのデコレーションまで大小さまざまな空間を花で演出してきた。彼が音楽祭事務局を訪ねたのは今年の春のことで、伝統ある音楽祭を花で飾りたいと自ら申しでた。これは長年彼が暖め続けてきた夢でもあった。事務局は斬新なアイデアとして同意した。音楽祭の会場の一つ「モーツァルテウム」はモーツァルト協会の本部でもあり、コンサート会場を備えている。番組では、この大ホールに花を飾ることになったグレナーの夢の実現までのさまざまな苦労をルポルタージュする。彼の活動拠点は、ドイツ・バーデン＝ヴュルテムベルク州ベーシックハイムにある。フランクフルトから特急で1時間半、豊かな自然に恵まれたこの地方はワインの産地としても知られている。彼の両親も園芸関係の仕事をしており、小さい頃から自然にこの世界に足を踏み入れるようになった。彼のデザインしたハート型の花器はドイツで爆発的にヒットした。

313.「流転～ナチスコレクションのたどった歳月～」〔1999年9月12日・「NHKスペシャル」・NHK・50分〕

今年4月、モネの「睡蓮」がフランスの美術館から所有者の遺族に返還された。また、1月にはニューヨーク近代美術館で展示中だった「ヴァリーの肖像」がニューヨーク地方検察局に差し押さえられるという事態が発生。絵を貸し出していたオーストリア政府がこれに抗議し、国際問題に発展している。このような問題はなぜ起こったのか。その背景には、第二次世界大戦中、ナチス・ドイツが美術品を略奪、転売したという事実がある。1938年、ヒトラーは自らの趣味とナチスの理念にかなった美術品を集め「総統美術館」を建設しようと計画。専門部隊を結成し、ヨーロッパ全土から約65万点もの美術品を略奪した。その中で古典的な絵画はコレクションとして手元に残したが、ヒトラーが退廃的だと嫌った近代絵画は、略奪の事実を隠すため、ナチス協力者の美術商が来歴を

改ざん、中立国スイスでオークションにかけられ、アメリカへ流出したケースが多いという。これらの事実は、東西冷戦構造の崩壊と戦後50年を機に、アメリカ軍の機密文書が一挙に公開されたことで、初めて明らかになった。文書によると、アメリカは1944年、西側にとって重要な美術品を取り戻す目的で、略奪美術品調査部隊を結成。約25万点を発見し、1500万枚に上る報告書を残した。現在、元の所有者の遺族に依頼され、これらの資料を手がかりに略奪美術品「ナチスコレクション」の追跡調査を行っている一人が、ウィリー・コルテ弁護士である。ドイツの大学で法律と歴史を専攻した彼は、ナチスによる美術品略奪の事実を知り、ライフワークとして問題解決に取り組んでいる。彼は、「絵には遺族の特別な思いがこめられている。単なる財産探しではない」と語る。最近になって絵が所有者に返還されるケースや、所有権をめぐる裁判が増えている背景には、遺族が孫の代になり、自分のルーツを探し始めたことあげられる。ただ、裁判が長期にわたると費用の問題も出てくるので、個人レベルでの問題解決はなかなか難しい。ナチスに奪われ、行方が分からなくなった美術品は、戦中戦後にどのような運命をたどったのか。番組ではナチスの闇のルートを負い、美術品に秘められた歴史を解明していく。

⇒関連映像資料：**22.「ヒトラー・コレクションの謎」**〔1989年１月20日・NHK、『法政理論』第33巻第３号　p.93　2001年〕

⇒関連映像資料：**216.「消えたユダヤ資産～問われるスイスの戦争責任～」**1997年10月31日・ETV、『法政理論』第35巻第４号　p.170－171　2003年〕

314.「記憶の中の壁～統一10年目のベルリン」〔1999年10月２日・「ETVカルチャースペシャル」・60分／製作：アンブレラ・フイルムズ、ドイツ1999年　原題：“After The Fall”〕

統合の動きが進むヨーロッパの中心都市ベルリンの現在の姿を紹介する。ベルリンの壁が崩壊してから、今年10年目になる。壁のあった場所

には次々と新しいビルが建ち、風景はがらりと変わった。人々の暮らしにも変化が起きた。かつて監視塔にいた旧東ドイツ警備兵は、転身して観光客相手に壁の破片を売っている。命をかけて壁を越えた亡命者は、収容施設の見学ツァーを主宰している。今も東側出身の市民の半数以上は、統一ドイツの生活になじめていないとも言われる。番組は、そうしたベルリン市民の日常の姿を取材する。レポーター、ブライアン・ラッド（アメリカの歴史学者）は、1986年から1988年まで当時の西ベルリンに滞在し、「ドイツの都市計画」「ベルリンの亡霊」などの著作がある。

315.「ドリース号・北海の夏を行く～北ドイツ・オストフリースラント諸島～」〔1999年10月3日・『地球に好奇心』・BS2・75分〕

かつて北海貿易で活躍し、今はほとんど姿を消した伝説の帆船チャルク船。一人の若者が復元されたチャルク船で北ドイツの海を駆け巡っている。その舞台は2000種類もの動物や植物が息づく世界有数の干潟。ここは干満の差が激しい海の難所ともなっている。この自然との暮らしをこよなく愛した若者の父は、廃船をもとにチャルク船を復元した。父の遺志を受け継いだ息子は、北海の自然とこの海に生きる人々に触れようと、帆船の旅を思い立った。時に荒波となって、時に干上がって船を寄せ付けない死の海北海、伝説の帆船に乗って世界でもまれな自然と人々の暮らしを訪ねるドキュメンタリー。オストフリースラント地方は、17～18世紀にかけてハンブルクとアムステルダムを結ぶ重要な海の交易路になっていた。当時アジアとの貿易を独占していたオランダがヨーロッパに持ち込んだお茶や陶器などは、干潟や運河航行に改良されたチャルク船と呼ばれる船が輸送手段として使われていた。だが、やがて蒸気船の発達とともに次第に使われなくなった。カロンジールの町にはかつて活躍した古い船が博物館として展示されている。

316―321.「ワイン歴史紀行　(1)ワインの始まりと神々　(2)帝国に咲いたワイン文化　(3)ワインの熟成期　(4)近世・新しい味との出会い　(5)全盛期から大危機へ　(6)新天地をめざして」〔1999年10月10／17／23／30日

・11月7／14日・『海外ドキュメンタリー』・ETV・各45分、原題："A History of Wine by Hugh Johnson" 制作：マローン・ギル・プロダクションズ＋WBGH・英／米　1988年〕

ヒトがぶどうから酒を作った最初の土地がどこかは明らかではない。最も有力なのはアジアとヨーロッパの境目のコーカサス山脈である。ワインは自然が人間に与えた最も素晴らしい贈り物の一つであるという。ワイン研究家ヒュー・ジョンソン氏のワインの歴史を巡る世界旅は、このコーカサスのグルジア共和国から始まる。(1)ワインの始まりと神々では、ギリシアのディオニソス信仰そしてイスラム教、ユダヤ教、キリスト教などの世界宗教とワインのかかわりについて世界各地を訪ね歩く。(2)帝国に咲いたワイン文化ギリシアとローマ文化の中でワインはどのように位置づけられるか、そしてワイン文化は周辺の世界にどのような影響を与えていくか。

「(3)ワインの熟成期、(4)近世・新しい味との出会い、(5)全盛期から大危機へ、(6)新天地をめざして」番組の冒頭では、11月の第3木曜日に始まる「ボジョレ・ヌーボー」が紹介される。「ボジョレ・ヌーボー」とは、フランスのボジョレ村でその年に作られた最初ワインのことである。いわば「一番搾り」といったところか。出来立てのワインを世界いっせいに飲み始めるというローカルなお祭りはワインブームの波に乗り世界中に浸透しつつある。ワインは今や、ヨーロッパという地域限定の飲み物ではなく、コカコーラと同様に世界中の飲み物になりつつあることをボジョレ・ヌーボーは象徴的に示しているといえる。番組では、ヨーロッパ以外の土地に足を運びワイン文化の世界化の実情を探っていく。

□アメリカのカリフォルニア・ワインの歴史、□オーストラリア大陸、□日本におけるワイン作り：6月と9月の長雨というワインに不適な気象条件をいかに克服してきたを検証。

322.「あなたが選ぶ20世紀・10大ニュース　第4回：ドイツ」〔1999年10月25日・NHK・75分〕

テレビ視聴者一人一人にとって、衝撃的なニュースは何だったのか。視聴者から寄せられたはがきやファックスなどで、20世紀を振り返る4回目。ベルリン、フランクフルト、ライプチヒ、ミュンヘンの4都市で、約1500人の市民が10大ニュースを選んだ。そのランキングの20位までを発表していく。このドイツのランキングの9位に入ったのが「統一通貨ユーロの導入」である。21世紀のEUの姿はどうなっていくのか。通貨統合へ向けた現状をVTRでリポートする。作家の土屋守、荻野アンナと、ドイツの元外交官ヴイルフリート・シュルテ氏がヨーロパの20世紀と21世紀についてトークを繰り広げる。少年時代に第二次世界大戦が勃発。生まれ故郷の村が戦場となったシュルテ氏の体験も紹介。少年だったシュルテ氏の目に時代はどう移ったのか、当時の体験はその後の人生にどんな影響を与えたのか、そうしたドイツ人の個人的ではあるがリアルな体験談をベースにしてアンケート結果について評価している。ドイツでのアンケートは、20世紀を10年に区切って、それぞれに10のニュースを選んでもらうという形式。個人面接　有効回答　1505人、結果は以下の通りである。

第20位：「水晶の夜」事件（1938年）　75票
第19位：世界恐慌（1929年）　179票
第18位：マイクロプロセッサーの開発（1971年）　184票
第17位：西ドイツNATOに加盟（1955年）　192票
第16位：アインシュタインの「一般相対性理論」の発表（1916年）　201票
第15位：ナチス政権の誕生（1933年）　205票
第14位：アメリカで「エイズ」初報告（1983年）　243票
第13位：大陸間無線通信の成功（1901年）　251票
第12位：ライト兄弟の初飛行（1903年）　256票
第11位：チェルノブイリ原発事故（1986年）　258票
第10位：ゴルバチョフ政権の誕生（1985年）　259票

第９位：単一通貨ユーロ導入（1999年）　270票
第８位：アポロ11号月面着陸（1969年）　272票
第７位：広島・長崎に原爆投下（1945年）　354票
第６位：ペニシリンの発見（1926年）　376票
第５位：東西ドイツ間にベルリンの壁（1961年）　477票
第４位：第一次世界大戦の勃発（1914年）　492票
第３位：ベルリンの壁崩壊（1989年）　549票
第２位：第二次世界大戦勃発（1939年）　610票
第１位：東西ドイツ統一（1990年）　619票

⇒関連映像資料：323.「二十世紀十大事件～歴史を動かした決定的瞬間～」〔2000年12月６日・『その時歴史が動いた』第32回・NHK・45分〕

【出演者】中西輝政　（京都大学教授・国際政治学）天野祐吉（コラムニスト）、川本三郎（映画評論家）、立松和平（作家）、下村満子（ジャーナリスト）。

番組のあらすじ：20世紀も間もなく終わろうとしている。この100年は一体どのような世紀だったのだろうか。今回の「その時歴史が動いた」は、特別編。視聴者からのアンケートの結果をもとに、20世紀の歴史を大きく動かした事件や出来事をご紹介する。アンケートの集計の他に「風と共に去りぬ」や「ゴジラ」などが登場する「20世紀を動かした映画」、女性宇宙飛行士のテレシコワさんや向井千秋さんらの活躍などを扱った「20世紀を動かした女性」など、分野別のコーナーもある。はたして視聴者が選ぶ、最も大きく歴史を動かした20世紀の出来事は何か。関東大震災と阪神大震災。大恐慌とバブル崩壊。上位に挙げられる20世紀の大事件を並べてみると、『歴史は繰り返す』という普遍の法則が20世紀にもあてはまることが見てとれる。貴重な映像を紹介しながら、今世紀を総合的に振り返る。アンケートの質問内容：「20世紀に起きた事件の中で歴史を大きく動かしたと思うものを政治・経済・スポーツ、ジャンルを問わず一位から十位まであげて

ください」

第20位	満州事変（1932年）	124票
第19位	バブル経済の崩壊（1991年）	126票
第18位	2・26事件（1936年）	137票
第17位	ライト兄弟の初飛行（1903年）	163票
第16位	地下鉄サリン事件（1994年）	177票
第15位	朝鮮戦争（1950年）	180票
第14位	日本国憲法公布（1946年）	181票
第13位	ソビエト連邦消滅（1991年）	195票
第12位	東京オリンピック（1964年）	203票
第11位	関東大震災（1923年）	205票
第10位	ニューヨーク株価大暴落（1929年）	248票
第9位	ロシア革命（1917年）	269票
第8位	阪神大震災（1995年）	315票
第7位	ベルリンの壁開放（1969年）	319票
第6位	第一次世界大戦（サラエボ事件・1934年）	359票
第5位	第二次世界大戦（ナチスドイツのポーランド侵攻・1939年）	421票
第4位	日露戦争（1904年）	451票
第3位	アポロ11号の月面着陸（1968年）	468票
第2位	広島・長崎への原爆投下（1945年）	908票
第1位	太平洋戦争（真珠湾奇襲・日本敗戦など・1941－1945年）	1343票

324.「ある日本の音楽家の回想～ベルリン・フィルとの40年～」〔1999年11月3日・『ETV特集』・ETV・45分〕

本年で、ベルリン・フィルハーモニー勤続40年の土屋邦雄さん。今年の2月に夫人の美幸さんを伴いベルリンの都心から南西にあるダーレム地区にある教会に付属する集会所を訪れた。そこは第二次大戦後、ベル

リン・フィルの練習所だった。そして、土屋さんにとって40年前にオーディション（入団試験）を受けた思い出の場所でもある（1959年）。元ベルリン・フィル団員ゲアハルト・シュテンブニク（オーボエ奏者）は、当時の土屋さんの試験のことを良く覚えていた。10人ほどドイツ人が演奏した後で小柄な土屋さんは大きく見えるビオラを力強く気迫を込めて演奏し始めた。ほどなくゲアハルトさんの後ろにいたヘルベルト・フォン・カラヤン（1908－1989）が言った。「もういい、この人で決まりだ」。土屋さんは昭和８（1933）年生まれ、東京芸術大学在学中から将来に期待がかけられていた。土屋さんの入団決定は日本の音楽会でも大きな注目を集めた。1964年ベルリン・フィルの戦後二度目の来日のときに初めて彼は日本の聴衆の前で演奏することになった。ベルリンに住み続けて40年、土屋さんをパイオニアとして、その後もドイツで活躍する日本人は増え続けている。ドイツ・オーケストラ連盟の統計によると、ドイツ全土の正式メンバー１万1147人のうち、９月現在で日本人は194人となっている。これは全体の1.7％であるが、アメリカ人が214人、ドイツに隣接するオーストリア、ポーランドがそれぞれ100人台であることを考えると、大きな勢力となっている。1963年には壁で隔てられたポツダム広場の近くにベルリン・フィルハーモニー・ホールが完成、カラヤンはここで録音だけはなく音楽映像も作成した。しかしカラヤンの映像へのこだわりは楽団員の不評を買うことになるが、帝王カラヤンに抗議するものは誰一人いなかった。一度、カラヤンの映像への過度のこだわりから演出がいきすぎたとして土屋さんは率直に反対の意思表示を示し、席を蹴ったとき団員からいっせいに「ブラヴォー」という声が上がった。今年の９月４日、土屋さんは66歳の誕生日を迎えた。ベルリンの地で激動の時代とともに生きた土屋さんはしみじみとブランデンブルク門の前に立つ。変わり行くベルリンの街の今後の行く末を見続け、若い日本人を育て、そしてベルリンに骨を埋めるつもりであるという。土屋さんは心の底からベルリンを愛している日本人の一人である。

325.「ベルリン・壁を見続けた男たち～崩壊から10年～」〔1999年11月3日・60分〕

壁の崩壊から10年、世界のマスコミから注目されている人物がいる。その人ハーゲン・コッホさん（59歳）は、旧東ドイツ秘密警察の一員として壁の建設から崩壊まで、壁の運命とともに生きてきた。コッホさんは1961年8月、壁の建設のために「チェック・ポイント・チャーリー」の付近に初めて境界線の目印となる白線を引いた人物である。ホーネッカー、後の東ドイツ国家評議会議長の率いる秘密警察にコッホさんが入隊したのは1960年，壁のできる一年前である。秘密警察はシュタージと呼ばれ、1949年東ドイツ建国と同時に作られた組織である。新しい国づくりの夢を抱く若者たちにとって、シュタージ入隊は憧れの的だった。コッホさんは何の疑いもなく東ドイツの国家目標にまい進して言った。だがシュタージは、協力者も含めるとおよそ50万人の人間を投入して、総合監視網を張り巡らし、市民の動きを細かくチェックするという秘密警察の役割を果たしていた。コッホさんは、息子が反体制運動で逮捕され、シュタージにひどい拷問を受けたことから、父親としてやがてシュタージに疑念を抱き始めていく。現在コッホさんは東ドイツの歴史や、シュタージの実態を人々に知ってもらうためさまざまな活動を行っていて、旧東ベルリンにある自宅の一部をその資料館とし、シュタージに関するさまざまな資料をそろえている。息子との関係修復もコッホさんに残された人生の課題である。

ハルトムート・リヒターさん（51歳）：1965年、当時18歳のリヒターさんは厳しい監視の目をかいくぐって運河を泳いで西ベルリンに逃亡した。西ベルリンの市民権を獲得したリヒターさんは東ベルリンからの逃亡を助ける組織に加わった。そして車のトランクルームやシートの下に隠して32人の逃亡を助けた。しかし1975年妹を助けようとしたときに検問所で見つかってしまい、二人とも投獄されてしまう。後に釈放され西ベルリンに帰ったが、西ベルリンにも3万人いたとされるシュタージの

協力者たちの手で彼の暗殺計画まで立てられた。そうした事実は、公開された機密文書で明らかになった。統一後、機密文書の公開により人間同士の信頼関係にも大きく亀裂が入ることとなった。番組では、二人のほかには、旧東ドイツ時代に受けた肉体的・精神的苦痛に対して補償を求める運動を行っているルディガー・シルナーさん（56)、壁を越えて逃亡しようとする東ドイツ市民を射殺した、元国境警備兵シュテファン・ショルツさん（40歳）などの生きざまや思いが紹介される。多くの人が、壁の崩壊によりその人生の歯車を狂わされたことが実感できるすぐれたインタビュー番組となっている。

326―328.「ベルリンの壁崩壊・大いなる自由をもとめて　(1)ブダペストの夢、(2)プラハからのメッセージ、(3)ベルリンの奇跡」〔1999年11月5／6／7日・『BSドキュメンタリー』・BS1・各50分〕

東欧の周辺諸国から始まった自由化の波は、1989年11月ベルリンの壁崩壊の序曲であった。人々が自由を求めるこの変革の時代のうねりを、3回にわたるドキュメンタリーで振り返る。

(1)　**ブダペストの夢**：1989年の夏、ベルリンの壁崩壊のシナリオは東欧から始まった。当時のハンガリー首相ネーメトは、ソ連改革派ゴルバチョフよりひそかに許可を受け、西側諸国へつながる国境沿いの鉄条網の除去を開始した。これにより、5万人以上の東ドイツ国民がハンガリーを経由して西側オーストリアへ流出した。ネーメト首相とゴルバチョフ元ソ連大統領のインタビューを通じ、自由化への流れを明らかにしていく。

(2)　**プラハからのメッセージ**：　ハンガリーの国境開放に続き、当時西ドイツや東ドイツとともに友好関係にあったチェコにも東ドイツからの難民が押し寄せた。プラハの西ドイツ大使館では彼らの受け入れを認めたのであるが、その一方で、東ドイツのホーネッカー政権は最後の抵抗に出て、自国民の流出を阻止しようと試みる。しかし、自由を求める国民の圧倒的な力に勝つことはできなかった。西側へ亡命を希望する市民

の動きと揺れ動いた政治状況の裏側を、ベーカー元アメリカ国務長官やゲンシャー元外相などの要人の証言でつづっていく。

⇒関連映像資料：107.「ヨーロッパ・ピクニック計画」〔1993年12月19日・NHK・90分『法政理論』第33巻第3号、p.137－138　2001年〕

(3) **ベルリンの奇跡：**　1989年の10月9日、東ベルリンの教会で自由を求める市民の集会が開かれた。この集会が発端となり、夜には7万人もの市民が集まるまでに発展した。東ドイツ政府は8000人の警官隊を動員するが、こうした集会は翌週も繰り返される。国家元首ホーネッカーの後を継いだクレンツは、10月30日から西ドイツ旅行の可能性を提示することでこの事態を切り抜けようとしたが、市民は受け入れなかった。そして11月9日、とうとうベルリンの壁は崩壊する。クレンツとコール元首相などの証言を通して、ベルリンの壁崩壊直前の東ドイツの政治の攻防を克明に伝える。

329.「生中継・ベルリンの壁崩壊10周年記念式典」〔1999年11月9日・BS1・＜70分＞

東西を分断する冷戦の象徴とされたベルリンの壁が崩壊からちょうど10年を迎えた。この番組は、10周年の記念行事をベルリンから衛星生中継で伝えるもの。ベルリンとの時差は8時間、連邦議会での記念式典に続いて、ブランデンブルク門前の広場前では『ヨーロッパ青年フェスティバル』と名づけられた行事も行われた。この広場は、最近になり「パリ広場（Pariser　Platz）」という旧名が復活した。番組は現地で取材している藤沢秀俊記者と結んで放送する。会場にはあいにくの小雨の中、若者を中心に3千人の人々がつめかけ統一10周年を祝っている。ドイツ政府およびベルリン市はこのフェスティバルを将来のドイツを担う若者を中心にしたいと考え、政府要人のスピーチの他に、世界的に有名なチェリストであるロストロポーヴィチ氏と若いチェリストとの合同演奏や、ロック・グループとのコラボレーションも予定された。崩壊10周年を記念してベルリンでは一週間にわたり、公私さまざまな記念行事が開催さ

れたが、最も公式的なものとして連邦議会では、壁の崩壊に直接的間接的に関わった人々への顕彰や演説が行われた。たとえばゴルバチョフソ連元大統領、ブッシュ〈父〉米元大統領、壁崩壊当時西ドイツの首相であったヘルムート・コール、現在首相のシュレーダー氏などが演説を行い、皆それぞれに壁崩壊に果たした東ドイツの人々の勇気を称えた。中でも藤沢記者が最も興味を覚えたのは二人の人物の演説であるという。ブッシュ大統領は、ベルリンの壁崩壊を、彼の任期中の出来事の中でも「湾岸戦争」(1990) と並ぶ大きな出来事であったことを強調し、まるでダリが描いたかのような『超現実的な光景』であったと述べたとのこと。そしてシュレーダー首相は「壁の崩壊は、ワシントンでもボンでもモスクワでも起きたものではない。それは勇敢で恐れを知らない東ドイツの人々が引き起こしたものだ」と指摘した。

330.「タクシーは壁を越えて～ドイツ・ベルリン～」〔1999年11月９日・『ヨーロピアンライフ』・BS１・20分〕

夜のベルリンを走る一台のタクシー。ベルリンの夜景も統一ドイツの首都という新たな運命の中でひときわ輝きを増している。壁崩壊から10年、首都の変貌を日々車窓から見つめ続けてきたのは、タクシードライバーのアンドレアス・フィッシャーさん、32歳である。フィッシャーさんは1967年、旧東ドイツに生まれ、シュターケン（Staaken；旧東ベルリン地区）の東西ベルリンを隔てる壁のすぐ傍の家で成長した。21歳のときにタクシードライバーになり、わずか一年後にベルリンの壁が崩壊、激動の歴史を身で持って体験してきた。統一後のベルリンでも仕事を続けながら、さまざまな人生模様を垣間見てきた。ある日のお客さんとの会話：フ氏「私は運がよかった。人生の良い時期に統一になった」。お客「残念だけど私には遅すぎたわ。もう50歳を過ぎていたもの。でもその後の変化にはうまく対応できたほうじゃないかしら」。統一前東ベルリンのタクシーは国営企業がおよそ600台を所有していて、しかも完全な売り手市場を形成し、「殿様商売」が可能であった。しかし統一後は

東西合わせて6000台になったため厳しい競争にさらされている。フィシャーさんは21歳のとき念願かなってタクシードライバーになったが、その翌年1989年大きな変革のうねりが始まった。フィッシャーさんは、パートナーのダニエラさんと一緒にハンガリー国境からオーストリアへの脱出をめざした、この年の8月に行われたいわゆる「ヨーロッパ・ピクニック計画」に参加していた。壁崩壊の3ヶ月前のことである。初めは東ドイツを脱出するつもりはなかったのであるが、チェコとの国境で東独警備兵にひどい扱いを受けたのがきっかけで、西側に逃げる決心をしたのだという。「ベルリンは私のすべてです。仕事場であり故郷であり、私の心です。ほかの都市での生活は考えられません。タクシードライバーは私にとってうってつけの仕事です。多くの人と知り合えるのが魅力です。ほかの仕事は考えられません。毎日仕事に出るのが楽しいんです。この仕事に満足しています。」フィッシャーさんのタクシーは、未来を見つめながら今日もベルリンの街を走る。

331.「ピエルタンとその要塞教会」〔1999年11月14日・『世界遺産』・BSN＜TBS系列＞・30分〕

カルパチア山脈に囲まれたルーマニア中部のトランシルバニア地方は、中世にはハンガリー王の支配地で、多くのドイツ人が開墾のために入植した。ドイツ人は、タタール〈モンゴル〉人やトルコ人の侵略に備えて、村の教会を城壁で囲い要塞化した。ピエルタンの村は、中世ドイツ人が作った家並みがそのままの形で保存されている。しかし、1989年の東欧の革命をきっかけに移動の自由が保証された多くのドイツ人たちが村を去り、憧れの祖国ドイツ本国へと次々と帰還して行った。現在、1600人の村人のうちドイツ人は95人。月一回、要塞聖堂でのミサは、ドイツ語で行われ、小学校でもドイツ語教育が続けられているが、民族固有の文化は失われつつある。村のはずれのドイツ人墓地には、第二次世界大戦中ルーマニア兵として戦い、戦後シベリアへ強制労働に駆り出されて亡くなった人々をはじめとして、国家主義的な政治暴力による多くのドイ

ツ人の苦難の歴史が刻まれている。

332.「杉原千畝（ちうね）とオスカー・シンドラー」〔1999年11月14日・『知ってるつもり！？』・TeNY＜日本テレビ系列＞・54分〕

杉原千畝氏のこと：元リトアニア領事代理。1900年岐阜県生まれ。早稲田大学在学中に外務省留学生試験に合格。書記生などを経て、1939年にリトアニア領事代理として赴任。同年ナチスのポーランド侵攻により、多くのユダヤ人が隣国のリトアニアに逃れてきた。米国などが移民制限を強化したため、リトアニアの日本領事館には日本の通過ビザを求める人たちが殺到。杉原氏は3度ビザ発給許可を外務省に申請したが、ドイツと同盟関係にあった日本政府はそれを認めず、杉原氏は独自の判断で通過ビザを発給した。終戦後の人員整理で1947年に外務省を退職。貿易会社勤務などを経て1986年に死去した。

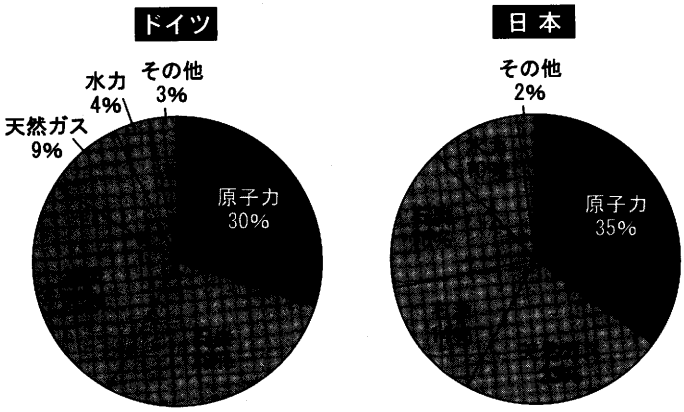
⇒関連映像資料：**333.「ZERACH（ゼラチ）」**（ドキュメンタリー映画）

杉原氏の「命のビザ」に救われ、後のイスラエル初代宗務大臣となってゼラチ・ヴァルハフティグ氏（94）の半生を描いたドキュメンタリー映画。1999年東京都千代田区の有楽町電気ビルで1999年9月28日に初公開された。当時、ユダヤ人の政治的指導者の一人だったヴァルハフティグ氏は、杉原ビザを所有した何千人ものユダヤ人を率いて東欧からシベリア経由で日本へ逃した。自身も昭和15年（1940年）から翌年まで神戸に滞在。その後イスラエルの独立運動に身を投じ、建国に大きく貢献した。ドキュメンタリー映画は、ユダヤ人の迫害の歴史を記録にとどめる目的で制作された。ヴァルハフティグ氏が3年前日本を訪れた際の模様を中心に、当時ユダヤ難民が日本人に温かく迎え入れられたことをうかがわせる映像資料が盛り込まれている。映画は、1999年6月にイスラエルの大統領官邸で上映されたもので、杉原氏の顕彰活動を続ける日本イスラエル商工会議所の藤原宣夫会頭が特別に借り受けて、日本語字幕版を制作した。藤原会頭は「杉原氏に限らず、当時多くの日本人がユダヤ人を救った。映画を通して、その事実を現在の日本人に知らせたい」と

話している。

334.「原子力を超えて～ドイツの試み～」＜シリーズ原子力②＞〔1999年11月18日・『ニュースステーション』・NT21＜テレビ朝日系列＞

1999年9月30日、茨城県東海村「JCO臨界事故」が起きた日の翌日、テレビ朝日は横浜のドイツ学園を取材している。東海村からはかなり遠いと、平均的日本人ならば考える位置にある横浜ドイツ学園では、事故の起きた日に保護者からの電話が殺到した。学園では放射能の影響を恐れ、教室の窓を全部閉め切り、授業用の装置で放射能を測定して、安全を確認した上で生徒を帰宅させた。ライナー・アドルフ校長は語る。「万が一放射能が横浜に届いても生徒たちへの被害を最小限に食い止めようとしたのです」。生徒の母親は「放射能が現場から10キロで消滅するなんて信じられない」と発言、ドイツ人の生徒にいたっては「日本人は与えられた情報をすぐに信じる」と辛らつな発言。このときの臨界事故をドイツの新聞は、チェルノブイリの事故に告ぐ大事故であると報道、事故現場からはるかに遠いドイツのほうがより強く危機感を感じているのは皮肉であると同時に、平和ボケした日本人の危機管理意識の甘さが露呈している。ドイツ市民の関心は、原発を「廃止するか否か」ではなく、「いつまでに廃止するか」にある。グラフを見ても分かるように、日独



ともに原子力エネルギーへの依存率はほぼ同じである。シュレーダー政権の公約の一つは、将来の原発の廃止にあった。それでは、どのようにしてドイツは原子力に変わる代替エネルギーを生み出そうとしているか。番組では官民それぞれに主体的にこの問題にかかわり、解決策を見出そうとする最近の動向が報告されている。

335.「歌劇・マハゴニー市の興亡」〔1999年11月18日・BS２・180分〕

1998年ザルツブルク音楽祭の収録番組。原作：ベルトルト・ブレヒト（Bertold Brecht)、音楽：クルト・ヴァイル（Kurt Weil)。合唱：ウィーン国立歌劇場合唱団。管弦楽：ウィーン放送交響楽団。指揮：デニス・ラッセル・デーヴィス。演出：ペーター・ツァーデク。あらすじ：（第一幕）警察に追われ闘争中の男女３人のやくざ者が砂漠の中で進退窮まった末、新しい町「マハゴニー」の建設を計画する。一大快楽都市を築こうとするもくろみは成功し、町は急速に発展する。そしてジミーをはじめとする荒くれ者たちもやがてこの町に流れてくる。（第二幕）ハリケーンの襲来を奇跡的に免れたマハゴニーだったが、人々の間では徹底した刹那主義がはびこり、「何でもやりたい放題にやれ」をモットーに、あらゆる快楽の追求にうつつをぬかす。４人の荒くれ者たちもやがてそれぞれに自滅の道をたどっていく。（第３幕）無銭飲食を理由に訴えられたジミーは、インチキ裁判によって死刑を宣告されてしまう。住民たちが更なる快楽の追及に狂奔し、犯罪が増加するという混乱した状況の中で、現代のバビロンとも言えるマハゴニー市は、破滅への道を突き進む。

336―338.「カラーでみる第二次世界大戦〈１〉混乱するヨーロッパ〈２〉総力戦〈３〉勝利と絶望」〔1999年11月25日・BS１・『海外ドキュメンタリー』・各45分〕

映画史上最初のカラー・アニメ劇場映画は、ウォルト・デイズニーの「白雪姫」（1938年）だとされる。第二次世界大戦の直前、カラーフィルムはまだ高価なもので、政治的プロパガンダ目的や、特定のアマチュ

アカメラマンにしか使用されていなかった時代である。こうした時期に記録されたカラーフィルムの映像は、言うまでもなく白黒フィルムに比べると、はるかに現実感が強い。以下では、各回ごとの主なトピックを列挙する。なお、それぞれの場面には、関連する人々の日記や手紙がナレーションションで紹介されていく。

各回ごとの主な映像資料：

(1) フランスを占領したドイツ軍（兵士の手紙）／東部戦線のドイツ軍とソ連兵の捕虜。

(2) 日系アメリカ人の強制収容所（日系アメリカ人の手記）／大西洋を横断するアメリカの輸送船とUボートとの戦い（両軍兵士の日記）／ドイツ軍占領地域での東欧におけるユダヤ人やパルチザンの公開処刑＜銃殺と縛り首＞／ワルシャワ・ゲットーの路上で死を待つ子供たち／東部戦線で敗色の濃いドイツ軍／ドイツ市街地への空襲を開始するイギリス空軍／夜間爆撃・投下される爆弾と焼夷弾／ハンブルク空襲の際の火事場風の光景＜ドイツの消防士が市民が撮影したもので戦後イギリス軍が没収した。燃え盛る市街地の路上で恐怖のあまり出産する女性もいたとのこと。この番組の中で最も衝撃的で悲惨なカラー映像である＞／B17による空爆／モルヒンゲン（ドイツ南部のシュワーベン）のロマニの孤児収容所＜人種衛生学者の研究施設で優生学的研究が終わると子供たちはアウシュビッツに送られた＞／中部太平洋のアメリカ海軍＜上陸作戦、ラジオのリポーターとカメラマンも同行＞／サイパン島上陸作戦＜崖から飛び降りて自害する民間日本人女性＞。

(3) ノルマンディー上陸作戦（1944年6月6日）／連合軍のパリ入城／空襲の恐怖と戦うベルリンの市街地風景／ドイツのプロパガンダ映画／ベルギーのアルデンヌにおけるバルジの戦い／ドイツの町に続々と入ってくるアメリカ軍とそれを見守るドイツ市民／ブーヘンヴァルト強制収容所の解放・強制的に見学させられる地元ドイツ住民。

⇒関連映像資料：339.「メンフィス・ベル」（“Menphis　Belle” 1990年

・米）監督：マイケル・ケイトン・ジョーンズ。第二次世界大戦の最中、ナチスの軍事基地を爆撃する任務を負った連合軍のB17爆撃機の編隊が飛び立った。その中には幾多の戦火を無傷で生還してきた強運の爆撃機もあった。「メンフィス・ベル」とはその飛行機につけられた愛称。（107分）

340.「ドイツ・モノづくりの魂を探して」〔1999年11月28日・『世界わが心の旅』・BS２・45分〕　旅する人：リチャード・クー（エコノミスト）。

クー氏は1990年のドイツ統一以後、経済の調査のためかつての東独の工業都市ドレスデンを何回か訪れ、統一後の旧東独地域の経済復興の進み具合を知るための定点観測の拠点にしてきた。クー氏（45歳）は世界各国の経済成長率や金融政策を分析し、経済予測を行うエコノミストとして第一線で活躍している。ドイツ統一の当初、旧東独は魅力的な投資と経済市場を形成するものと期待されていたが、既存の設備の老朽化のあまりのひどさに投資家の熱は急に冷め、加えて西側の企業と競争できる企業はほとんどなく、競争にさらされた既存の企業も数多く合理化・人員整理が相次ぎ、大量の失業者を生み出す結果となった。クー氏がドレスデンを定点観測の地に選んだ理由は、この地域に旧東独の基幹産業のひとつであったカメラ・レンズ産業が集中しているためである。第二次世界大戦後、東ドイツは「カメラ産業」の育成に力を注いできた。その品質の高さは西側でも注目され、数少ない輸出産業として重要な役割を果たしていた。しかし生産技術は独自に発展を遂げたため、その実態は西側にはあまり知られていなかった。クー氏の今回の訪問の目的は、自分の趣味がカメラだということもあり、カメラ・レンズ産業をミクロ経済の視点から調査することだった。番組の前半では、旧東独の伝統あるカメラの歴史が紹介される。クー氏の主な訪問先：＜ドレスデン技術博物館（1999年開館）＞、ここではこの町で生み出された画期的なカメラの数々が展示されている。＜PRAKTIKA　カメラ工場＞厳しい競争

のためについに製造中止に追い込まれ、今では修理部門のみを残す。＜フラウエン教会＞16世紀に作られたが、第二次世界大戦で破壊されドイツ統一後再建が始まる。破壊されたときの瓦礫には番号がつけられ再建を待って保存されていたことには少し驚かされる。建設当時の材料をできるだけ利用しようというものである。資金はドイツ全土だけでなく、ヨーロッパ各地から集まった寄付によってまかなわれている。＜ドレスデン郊外の共同墓地＞リヒャルト・フンメルさんの墓参り。彼は、戦後東独のカメラ開発に情熱を注いできた技術者。クー氏は未亡人のゲルトルート・フンメルさんと一緒に墓参りをする。フンメルさんの著書『ドレスデン・カメラの歴史』をもとにした『東ドイツカメラの全貌』の出版にクー氏もかかわっていたためである。みずからの著書を通してクー氏に「伝統技術を基礎としたものづくり」の精神を教えてくれたのである。フンメルさんはご昨年の1月に75歳で亡くなっていた。クー氏は敬意を込めて墓前に本を捧げた。クー氏は、今回の旅でドイツ経済を支える底力のようなものを強く感じて日本への帰路に就いた。

341.「センメリング鉄道（オーストリア）」〔1999年11月28日・『世界遺産』・BSN＜TBS系列＞・30分〕

オーストリア・アルプスに向かって走る普通列車。19世紀半ばオーストリアで建設されたセンメリング鉄道は、世界で初めてアルプス越えを果たした鉄道である。全長41km、最高到達点は海抜895m。列車は約40分をかけてアルプスの険しい山並みを越えていく。途中の渓谷にかかる「カルテリンネ高架橋」は、古代ローマの建築様式を意識して設計されたという雄大な二層構造の橋。センメリング鉄道を代表する建造物である。自然と建築との調和をテーマに建設されたセンメリング鉄道には、こうした19世紀の鉄道建築が数多く残され、しかも今もなお現役で使われ続けていることは大変な驚きである。「パイヤバッハ駅」の駅舎は鉄道建設当時のデザインがほぼそのままに残されている唯一の駅。19世紀末オーストリアの駅の様子をしのぶことができる。かつての駅の利用客

としては、心理学者ジグムント・フロイト、作家アルトゥール・シュニッツラー、皇帝フランツ・ヨーゼフらが名を連ね、彼らの写真が駅のホームを飾っている。「踏み切り」は、人力（手回しのギアとハンドル）で上げ下ろしするものがある。監視所には昼夜に交代で24時間鉄道員が詰めている。こうした鉄道の運営形態にも現代の鉄道ではすでに失われてしまったシステムが数多く残されているのが「センメリング鉄道」の大きな特徴ともなっている。（英語名：Semmering Railway, Austria. 登録年：1998年）

342.「ホロコーストといかに向き合うか～ドイツ・ヴァルザーとブービスの論争～」〔1999年12月11日・『ETV カルチャースペシャル』・60分〕

ドイツ、ワイマール郊外「ブーヘンヴァルト・メモリアル」はナチス時代の強制収容所の跡地である。ここには毎日およそ300人の高校生たちが訪れる。そして第二次世界大戦中、ナチス時代に起きた大量虐殺、いわゆるホロコーストの現場でその歴史を学んでいる。戦後ドイツはナチス時代の過去の歴史を、若い世代に詳細に伝える取り組みを続けてきた。「過去の克服」を合言葉にナチスの行為を明確に否定し、責任追及の手を緩めなかった。しかし、その背後にある複雑な国民感情が表出する事件は後を絶たない。そのドイツで「ホロコースト」をめぐる熱い論争が起きた。現代ドイツを代表する作家マルティン・ヴァルザー(72歳)は「アウシュビッツ」と聞くたびに覚える抵抗感から、この言葉は道徳的な脅しの道具になっていると発言した。「アウシュビッツを威嚇のために振りかざしたり、何かを強いるための道徳的な棍棒にしたり、手段にしてはいけない。このようなことをしていると、それは唇だけの祈りになってしまう」。一方、ユダヤ人指導者イグナツ・ブービスは、彼の発言にホロコーストの議論を終結させる「精神的放火（die geistige Branndung)」であると痛烈に批判し次のように述べた。「ヴァルザー氏は、目をそむける文化、考えることをやめる文化について明言した。そのような文化はナチス時代には当たり前のものであったが、今日では

二度と当たり前にしてはいけない」。すべてをナチス時代と結びつける考え方をやめ、新しい付き合い方をしたいというヴァルザーの発言に抗議の声が上がった。論争は燃え広がり、ドイツ全土から2000通を越える手紙が両氏の元に届けられた。なぜこのような論争が起きたのか、そしてどのように論じられたのか、ホロコーストの歴史と向き合うドイツの今を探る。両氏の演説映像・ニュース映像そして記録映像を手際よく構成して深みのある内容に仕上がっている。

⇒関連映像資料：145―146.「断罪か、黙認か　第一章：わが友ハイデッガーはナチ党員だった　第二章：ハイデッガー、わが親しき敵よ」〔『法政理論』第34巻第1・2号　p.40―41　2001年〕

343.「ウェルナー・フォン・ブラウン博士～宇宙への夢～」〔1999年12月19日・『知ってるつもり』・TeNY＜日本テレビ系列＞・55分〕

第二次世界大戦後の、米ソによる宇宙開発競争は、両陣営の「冷戦」対立の延長線上にあった。戦後の二大国のそうした科学技術開発の中核を担ったのは、ナチス時代にヒトラーのもとでロケット兵器の開発研究に専念した多くの技術者たちであったといわれる。ヴェルナー・フォン・ブラウンは、ロンドン市民を恐怖に陥れたロケット「V２号」を開発した中心人物であった。1944年、ナチスの敗北を見て取ったブラウンは研究開発資料を満載したトラックで多くの同僚たちとともに、ドイツ北部のペーネミュンデからアメリカ軍支配下のドイツ南部を目指して決死の脱出口を試みる。米軍に拘束され、戦後アメリカに渡った技術者たちは、やがてアポロ計画にかかわり、多大な成果を収める。宇宙開発競争でソビエト連邦が優勢であった1960年代の初め、ブラウンは当時のアメリカ大統領J･F･ケネディにひそかに耳打ちしたという。「月に行くのはわれわれが最初です」と。1968年、人類は初めて月に降り立った。NASAの宇宙センターでは、一人の初老の男性がその光景を満足げに見守っていた。時間はさかのぼり1920年代、ベルリンの自宅で望遠鏡を通して月を眺めては、いつか月に行きたいと目を輝かせていた一人の少年の姿が

あった。ヴェルナー・フォン・ブラウンの年表：1912年　ドイツのピルジッツに生まれる。1926年「惑星空間へのロケット」（オーベルト著）と出会う。1930年　ベルリン郊外のライニケンドルフレでロケット実験を始める。1932年　ドイツ陸軍ロケット研究所に入る。1942年　世界初の長距離ロケットＡ４号打ち上げ成功　1945年　アメリカ軍に投降　1951年１「化成計画」出版　1958年人工衛星エクスプローラー打ち上げ成功　1969年　アポロ11号　月に着陸。1977年　永眠（享年75歳）

344.「クリスマスのオレンジ」〔1999年11月28日・『NHK 海外ドラマ』・NHK〕

ドラマの舞台は、フランスのアルザス地方の小さな村。時代は、次第に強大になる隣国プロイセンとの対立が少しずつ深刻さを増していく1860年代後半である。都会から若い女性が教師として赴任してくる。閉鎖的で因習の深い村の中で初めは徹底的によそ者扱いされるが、さまざまな出来事を通して次第に受け入れられていくようになる。彼女の目指す開かれた教育方針にとって最大の障害は、厳格な宗教的規範にもとづいて教育をしようという、いわば守旧派のカトリック神父だった。古い伝統の復活と権勢欲に満ちた神父は彼女を失脚させようといろいろと画策するが、彼女は一つ一つそれを克服していく。彼女の教育方法は、自閉症だった娘を高校合格へと導く。それがきっかけとなり、ブドウ畑の開発を夢見る娘の兄と急速に親密となっていく。二人は結婚の誓いを立てるが、その喜びもつかの間、青年には「召集令状」が届く。明日出頭せよとのこと。いよいよ「普仏戦争」が始まったのだった。ドラマは一夜きりの夫婦となった主人公たちの家に、「戦争が始まった」と知らせに走ってくる村の若者のストップモーションで終わる。（118分）

345.「バイエルンのパイプオルガン」〔1999年12月26日・『世界とてもクラフト』・BS２・25分〕案内役：星野知子（女優）、ゲスト：金澤正剛（国際基督教大学、日本オルガン協会会長）。

世界の伝統工芸品を訪ねるシリーズ番組。今回はドイツのパイプオル

ガンの製作工房を訪ねる。ドイツ・バイエルン州はカトリック教徒が多く、教会の礼拝にはパイプオルガンが欠かせないものとなっている。この楽器の歴史は意外と古く、古代ギリシアにまでさかのぼるといわれ、キリスト教の教会では8世紀ごろから使われるようになった。パイプオルガンは時代や地域によって、構造も音色も異なる。それだけに一台一台から製作者の思いが伝わってくるとも言える。バイエルンの州都ミュンヒェンから南へ50キロの町に、オルガン職人フベルトス・フォン・キャッセンブロックさんの工房がある。弁護士の家に生まれた彼だが、子供の頃ころから近所のオルガン工房を遊び場にしていた。そして、いつしか自分もオルガン作りの道を志すようになったという。パイプオルガンは設計から完成にいたるまでおよそ一年を必要とし、部品はすべてが手作りで、複雑かつ綿密な製作工程を経なければならない。番組では、パイプオルガンの製造過程をカメラで丹念にしかも分かりやすく紹介する。さらにゲストの金澤氏は、ヨーロッパにおけるパイプオルガンの普及の歴史を詳しく解説する。

参考文献

吉田　和比古「ハイパーテクストとしての『言語』と『映像』」「新潟大学教養部研究紀要」第25集　65－77頁　1993年。

吉田　和比古「都市の記号論～ベルリン・二項対立の首都再生～」『新潟大学言語文化研究』〔新潟大学人文学部・法学部・経済学部　第2号1－14頁　1996年。

吉田　和比古「メディア、あるいはファシズム(1)　レニ・リーフェンシュタール論～」『法政理論』新潟大学法学会　第30巻　第2号　1－27頁　1997年。

吉田　和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(1)ドイツ戦後史の映像レファレンス～」『法政理論』新潟大学法学会　第33巻　第2号　66－150頁　2001年。

吉田　和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(2)過去をまなざしつつ、統一後の新たな再生へ向かって～」『法政理論』新潟大学法学会　第34巻　第1／2号　22－61頁　2001年。

吉田　和比古「都市の記号論(2)ベルリン：日本のマスメディアのまなざし～」『新潟大学言語文化研究』〔新潟大学人文学部・法学部・経済学部　第８号167－180頁　2002年。
吉田　和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(3)～映像は未来を予見する～」『法政理論』新潟大学法学会　第35巻　第４号　22－61頁　2003年。
吉田　和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ(4)～1998年：ICEは凍りついた～」『法政理論』新潟大学法学会　第36巻　第２号　１－46頁　2003年。